

---

# 流星のロックマン 大切な絆の物語

牛先輩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 大切な絆の物語

### 【Nコード】

N9945S

### 【作者名】

牛先輩

### 【あらすじ】

世界を3度救った青きヒーローロックマン

突如現れた者達に仲間を・ブラザーを奪われてしまう

一体奴らの目的とは！？

注意作者は一応ロックマンEXEと流星のロックマンをほぼ全部プレイした事がありますが

あんまり覚えていませんよってこの小説独自の設定が多いです  
タイトル変更しました

## キャラ紹介 電波人間編（前書き）

いまさらキャラ紹介です

あとキャラ紹介は基本流星知ってる人しかわかんないくらい説明下手です

できるだけわかりやすくできるように頑張ります

一応他のを参考にしてます

## キャラ紹介 電波人間編

### 星河スバル

赤い服と流星のペンダント（あとツンツン頭）が特徴の小学6年生  
ウィザードのウォーロックと電波変換し  
地球を3度救った青きヒーローロックマンに変身することができる。  
メテオGの件から正体がバレかかっている。  
性格は真面目なところがあり誰よりもキズナを大切にする。

### 電波変換時の技

ロックバスター 左から放たれるバスター攻撃  
シールド 威力が低ければどんな攻撃も防げる  
他には基本バトルカードを使い闘う

### ウォーロック

元AM星人であり現在はスバルのウィザード。  
性格はガサツでバトルマニア。

### 技

ビーストスイング 自身の爪で切り裂く攻撃  
エリアイーター 相手との距離を急激に詰める技

### 響ミソラ

小6の天才歌手（よくするにアイドル）。  
スバルの一番の親友であり彼の初めてのブラザー。  
ウィザードのハープと電波変換しハープ・ノートになれる。  
性格は明るく活発で優しいといういろんな意味で超人。  
さらにその見た目からは想像できないくらい大食いでゴン太といい勝負。

電波変換時の技

ショックノート 音符型の弾丸

パルスソング 音波攻撃

マシンガンストリング ギターの弦で突き刺す技

ヒールノイズでの技

重力変換 自身への重力を変化させてスピードとパワーを上げる

ノイズ変換 自身へのダメージをノイズに変換しノイズ率を上げ回復する

ヒール・ホワイต์・ホール ノイズ率の高さだけ当てた相手にダメージを与える

たまにバトルカードを使用

ハーブ

ミソラのウィザード、元FM星人。

「ポロロン」が口癖でウォーロックとくらべ冷静な性格。

よくウォーロックをからかうのでウォーロックからは苦手意識をもたれてる。

昔FM星でオヒュカスに怒らされたときオヒュカスと喧嘩になりボコボコにした。

だからウォーロックから苦手意識をもたれてるのかもしれない。

暁シドウ

かつてディーラーの幹部だったが現在はサテラポリス遊撃隊長。

一年前ディーラーアジトでの闘いでジョーカーの自爆を自身を犠牲に阻止しようとし死亡した・・・と思われていたが

半年前ボロボロの状態で帰ってきた、しかしなぜ生きていたかは不明。

性格は子供のようなが「大事なものは命を犠牲にしても守る」という

強い心を持っている。

ウィザードのアシッドと電波変換しアシッド・エースになれる。

電波変換時の技

オメガレーザー 肩から放つ極太レーザー

ウイングブレード 超高速に加速しながら敵を切り裂く

ラストジャッジメント 作中では細かく語っていないが対電波人間用技

ウイングブレード以上のスピードで相手の纏っている電波を切り裂く技

他にも7つの技を繰り出す

アシッド

暁のウィザード。彼を「シドウ」と呼ぶ

人間との電波変換を目的に作られたが電波変換した暁の負担はでない。

性格は暁と違い真面目……だが暁に影響されてか

たまにウォーロックをからかったり暁にツッコミを入れたりするお茶目な一面がある。

技

ギルティスラッシュ 素早く相手を切り裂く技

ジャック

元ディーラー幹部。

性格は残虐なところがあるが子供っぽい一面もあり姉想い。

任務でコダマ小学校に転校してきたが

スバルや委員長と接していく内に現在の子供っぽい一面が出てくる。

現在はサテラポリス遊撃隊の仕事を手伝っている。

ウィザードのコーヴァスと電波変換しジャック・コーヴァスになる。

#### 電波変換時の技

グレイブクロー 爪の形をした紫の炎を飛ばす技  
フェザーシックル 羽を鎌に変化させ相手を切り裂く技  
エアロダイブ 空中から相手に突っ込む技  
ペインヘルフレイム 何個もの炎を投げ飛ばす技

#### コーヴアス

元FM星人でジャックのウィザード。

昔は宇宙のさまざまな星をヴァルゴと共に滅ぼしてきた。  
ブライにデリートされたが後に再構築された。

#### クインティア

ジャックの姉で元ディーラー幹部。暁とヴァルゴには「ティア」と呼ばれている。

暁を「シドウ」と呼び彼とは恋仲であるが  
彼の子供っぽさにいつも手を焼いている

ウィザードのヴァルゴと電波変換しクイン・ヴァルゴになれる

#### 電波変換時の技

ハイドロドラゴン 水のドラゴンをあやつり攻撃する  
ライトオブセイント

#### ヴァルゴ

元FM星人でクインティアのウィザード。

コーヴアスと同じくさまざまな星を滅ぼしてきた。  
ブライにデリートされたが再構築された。

「キヤハハハハハ」という特徴的な笑い方をする

#### クロウ

オリキャラ。

15歳の天才科学者……

だが本人はそう言われるのを嫌がっている。

とにかく人の言葉を遮るのが好きでウォーロックによく怒られるが無視している。

ちなみに好きな食べ物はハンバーグステーキ、好きな色は黒。

作中一のお調子者で皆に手を焼かせてる。

アシッドに命の恩人といわれておりなにかあった様子。

ウィザード(?)のブルースと電波変換しブルース・クロウになれる。

ブルース

本編未登場。

200年の伝説のナビの一体のコピー。

レッドスター先生

一応オリキャラ

別の小説の世界から来た作家。

作者も知らない事が多くかなり謎な人物。

ウィザードのエージェントと電波変換しレッド・エージェントとなる。

電波変換時の技

グレイブメテオレーザー

ノイズを圧縮した極太レーザー

エージェント

クロウとレッドスター先生のウィザード。

電波変換せずともファイナライズし

エージェント・ソルジャーになれる。

## キャラ紹介 電波人間編（後書き）

結構他の先生のを参考させてもらいました  
てか切り裂く技多い・・・

ライドオブセイント説明ムズイので飛ばしてます  
あとゴン太とブライの説明は今度します

## プロローグ（前書き）

文章力ないですけどよろしくお願いします

## ブローグ

「いきますよ暁さん」

「来い！ロックマン」

「ウエーバトル・ライドオン」

この少年はロックマン

世界を何度も救った青きヒーロー

「頑張れーロックマン」

彼女は響ミソラ

今、話題のアイドル歌手だ

「ウオーがんばれーロックマン！」

この大きな体型したのが牛島ゴン太、ウィザードのオックスと  
電波変換しオックス・ファイアになる

「頑張ってくださいロックマン」

この小さいのが最小院キザマロ

「小さいってなんですか！？」

相棒はペディア・・・

「無視ですか！？」

「絶対勝つて下さい！！ロックマン様ーーーーー」

このドリル・・・この少女は白金ルナ

コダマ小学校の生徒会長、通称いいんちよう、相棒はモード

「いくぞ！！アシッド！！」

この青年は、暁シドウ、サテラポリス遊撃隊隊長である

ウィザードのアシッドと電波変換し今の姿アシッド・エースになる  
そしてこれらの仲間達と・・・いや

仲間達を巡る戦いが始まる

## 第一話 はじまり（前書き）

技名はわかんないの多いのでオリジナルだったりします

## 第一話 はじまり

「バトルカード ソード！」

「ロックオンソード」

二人のソードが激突する

「バトルカード ワイドウェーブ！」

『させません！ギルティ・スラッシュ！』

アシッド・エースこと暁シドウのウィザード、アシッドが  
水の刃を切り裂いた

「今だ！ロック！」

『オオツ！ビーストスイング！』

『ぐわっ』

ロックマンのウィザードウォーロックが  
アシッドを切り裂く

「よしっ！」

「甘いぞ、ステルスレーザーそしてマヒプラス！」

「ぐわあああ」

マヒプラスによりロックマンはマヒした

「とどめだ！！ウィングブレード！！」

アシッド・エースは、突撃の体勢に入る

「くっ！カウントボム！」

マヒしながらもロックマンはバトルカードを使うが

「むだだ」

アシッド・エースはカウントボムは破壊しながら突撃する

『くそっノイズチェンジさえできれば』

そうメテオGが消滅しロックマンはノイズチェンジができなくなっ  
ていた

「これで終わりだ！」

カーーーーーー

突如2人を・いやミソラ達も光が包む

「「「「「わああああ」「」「」

そして光が消えると・・・

## 第一話 はじまり（後書き）

バトル下手ですいません。

ノイズチェンジできないのは、この小説独自の設定です  
公式ではわかりません

## 第二話 現れる敵

光が消えるとそこには見知らぬ4人が立っていた

「な！だ、誰だ！？」

アシッド・エースは動揺していた

そうここは「物質&電波完全遮断空間」

つまり扉から入る以外どんな人間、

電波体でもたちまち大怪我を負ってしまう

そしてもう1つアシッドが怯えていた

アシッドは全ウィザードの中でもトップクラスの

強さを誇り高い計算能力、データ収集力を持っている

そのアシッドが怯えているということは

(とてつもなく強いということか)

しかしミソラ達はそれ以上の驚きだった

「け、健太！？」

「タイソン君？」

「ホ、ホオープー」

「ピアーノさん」

委員長、ミソラ、ゴン太、キザマロの順だ

「えっ知り合い？」

バサッ

さらに一人マントとフードの男が現れた

「・・・どーも皆さんこんにちわ」

ロックマンはゾツとした

「な、なんだこの人！？」

『やべー周波数だ』

「ちよつと失礼」

謎の男の腕が急に伸びた  
それも委員長目掛けて

委員長に手が届く瞬間

フオーン

楽器の様な音が響く

### 第三話 二人の助け人

「ショックノート!」

楽器の様な音が鳴り響き音符の様な物が  
謎の男の腕に直撃する

「ほう」

しかし腕はほとんどのけぞらず委員長にギリギリ当たらない程度だった

「しかし」

男は腕を元の長さに戻し再び委員長に向け伸ばした

「オックスタツクル!!!」

今度は赤い牛の様な姿をした者が謎の男にタツクルする

ヨロけながらも男は

「なるほど、まず腕を攻撃し私の注意をそらし

その隙に私―（本体）を攻撃したわけですね

ハープ・ノートさん、オックス・ファイアさん」

「「!!!」」

そう攻撃したのは

響ミソラが電波変換した、ハープ・ノートと

牛島ゴン太が同じく電波変換した姿、オックス・ファイアだった

「何故私達の事を？」

「そーだ、そしてあい「彼らはどういうこと!?!」」

ハープ・ノートはアシッド・エース同様落ち着いてはいなかった

「はて?教える義理は……ありませんよ!」

謎の男の両腕が急激に伸び、ハープ・ノートと

オックス・ファイアの首を絞める

「うっ!」

「うわっ」

「ミソラちゃん!!!ゴン太!!!」

ロックマンが助け入ろうとしたその時  
ズバッ　ズバッ

？「！」

なんと助けたのは4人の内の一人と  
孤高の戦士ブライだった

### 第三話 二人の助け人（後書き）

短いかな？

#### 第四話 敵の正体其の1（前書き）

前回のサブタイトルビミョーなので変えるかも

#### 第四話 敵の正体其の1

「ほうあなたはたしか、えー・・・あつ！

確か・・・ブライさん・・・ですね」

「ふんっ」

「それと・・・タイソン、何をしてるんですか？

私の腕を叩き切るなんて」

「何を言う？契約したはずだ

ミソラ・・・コイツに手は出すなと」

「タイソン君・・・」

そこにハープ・ノート・・・響ミソラのウィザード

ハープがウィザードオンする

『あなた一体何！？敵なの！？味方なの！？』

「さーな」

その時ブライが口を開く

「タイソン・・・」

「ブライ・・・いやソロ久しぶりだな」

「ああ」

「ソ、ソロ！！知ってるの？」

ロックマンの問いにブライは

「黙れ」

ブライの重い「黙れ」にロックマンはショックを受けた

「別に隠す必要も無いか・・・」

おれはベルセルク・タイソン、ムーの生き残りだ」

「えっ！？」

ロックマンは驚きを隠せなかった

「そして俺は、あいつにある感情がある」

ベルセルク・タイソンが指差したのはハープ・ノートだった

「俺の仲間・・・いや同盟にはそのデブとちびとドリル女にそれぞ

れある感情がある・・・」

タイソンは言いたい放題だったしかし  
いつもなら怒る委員長達がなにも言わない  
その考えはまだ彼（彼女）らはなかった

「ある感情？どういうこと？タイソン君？」

「それは・・・その内分かるさ」

「・・・」

沈黙が続くと・・・

「助けてーロックマン様ー」

「委員長！？」「ルナちゃん！？」

気づいた時には委員長、キザマロ、そして

電波変換が解けたゴン太が謎の男に捕まっていた

「みんな！」

ロックマンは謎の男に向かって走った

「待て！！ロックマン！！」

敵の強大さを知っているアシッド・エースは

ロックマンを止めるがロックマンは止まらなかった

「オオオオオオオ　ロックバスター！！」

## 第五話 敵の正体其の2

ロックマンの放ったフルチャージのロックバスターは  
謎の男に命中・・・しなかった、あっさり防がれていたそれも  
片手で

「なるほど中々のパワーですね、「10分の1」の力を出さざるを  
えませんでした」

『じゅ、10分の1だと!?!』

ガタガタガタガタ

ロックマンは震えていた

それもそのはずここまでの力の差を見せつけられては

「さて、ハープ・ノートさん貴女もいただきますよ」

ザッザッ 1歩ずつゆっくり謎の男はハープ・ノートに近づく

「こ、来ないで!?!」

『ミソラ!逃げましょう!?!』

「いや!ルナちゃん達を見捨てられない」

「強がらないで下さいほら、震えてますよ?」

「うつ!」

ガタンッ

突然部屋の扉が開いた

「何事なの!?!」

部屋に入ってきたのはサテラポリス化学部門統括のヨイリー博士だ  
った

「あ、あなたは」

ヨイリーが現れ謎の男は怒りの表情を見せる

そしてすぐ元の落ち着いた表情に戻り呟く

「まずいな」

「なぜ貴方がここにいるの!?!」

EXEロックマン!?!」

その瞬間EXEロックマンと呼ばれたものはフードを取った  
その姿は200年前世界を6回も救ったもう一人の青きヒーロー  
ロックマンEXEだった

「簡単ですよ、彼らと同じある人物にある感情があってね」

「どうする？EXE」

「引きましょう」

「だがまだミソラが!？」

「いずれ奪います」

「そうだぜタイソン落ち着けよ」

委員長に「健太」と呼ばれた人物はそう言った

「ちっ!・・・ミソラ!」

「!・・・」

「いずれ迎えに行くぜ」

俺らは、「ファイリングス」だ」

「EXEももうぬいたあ？」

EXEの右手には光った球体があった

「ええ」

フワッ

ファイリングスは突然浮きそして

カッ

突然の光にまぎれ消えた・・・

委員長達の体だけ残して

## 第五話 敵の正体其の2（後書き）

謎の男の正体見抜けた人いるかな？  
次回からやつとバトル・・・かも

## 第六話 悲劇（前書き）

やっとなバルの説明・・・

## 第六話 悲劇

ロックマンとハーブ・ノートとアシッド・エースは  
電波変換を解きそこに

緑のメガネ、赤い服、流星型のペンダントをした少年が現れる  
この少年は世界を3度救ったロックマンの正体

星河スバル、ウィザードのウォーロックと電波変換しロックマンに  
なれる

そして響ミソラ、暁シドウも姿を現し即スバルと共に

委員長達のもとへ走る

「委員長！キザマロ！ゴン太！」

「……う」

委員長が目覚ます

「よかった！無事だったんだ」

「……よかった・グス」

しかし暁は1つ大きな疑問があった

（なぜ彼女らを狙ったのにおいてったんだ？……まさか）

「あなたは……」

生きていた事に喜ぶスバル達だが

委員長から重い一言が出る

「あなたたちは……誰？」

「……！」

「何を言ってるの？僕だよ！星河スバルだよ」

「一体どうしたの！？ルナちゃん！」

「まさか……」

『ええ』

「暁さん！アシッド！何か分かるの！？」

怒鳴るように聞くスバル

「今……白金ルナはいや他の二人もだろう」

おそらく奴らによって記憶を抜かれている」

「……」

二人は言葉がでなかった

「ヨイリー博士……」

「ええ、わかつてるわ」

「二人とも三人は

ヨイリー博士と医療チームが検査する、今日は……帰るんだ」  
ポツポツ

穴の空いた天井から雨が降ってきていた

――コダマタウン――

ガチャ

「スバル！どうしたの！？びつしよりじゃない！

早く家に入って体拭いて！風邪ひいちゃう！」

「いい……大丈夫」

「……」

いつもうるさいウォーロックも今は黙っていた

## 第六話 悲劇（後書き）

少し暗いですね・・・次回から明るくするよう努力します  
余談ですが流星3アマゾンで注文しましたこれでもう一度  
流星3の物語が楽しめる。やったーーーー（心の声）

## 第七話 新たな絆（前書き）

結局暗くなりそう・・・

## 第七話 新たな絆

「くっそー」

スバルは何度もベッドを殴りながら叫んだ

『スバル！落ち着け！！』

ハンターV.Gの中からウォーロックは声をかける

「落ち着けないよ！！だって皆が、皆が」

「いーや落ち着け」

『！お前はジャック！！なんでここに！？』

「電波変換したに決まってるだろ」

『でもコーヴァス達はデリートされたはず』

「再構築したのよ」

「クインティア先生……」

この少年はジャック 以前ディーラーに入り地球を滅ぼそうとした

元F.M星人のコーヴァスと電波変換しジャック・コーヴァスになれる

彼女はクインティア ジャックの姉で

元F.M星人のヴァルゴと電波変換しクイン・ヴァルゴになる

『キャハハハハに暗くなってるんのおー？』

『うるせーヴァルゴ！』

『根暗作者のおかげで大変ねえー』

「とにかく明日早朝ヨイリー博士のところに来て」

「……はい」

「スバル……暁から全て聞いた……」

すまねえ、俺らがいればあいつらを……」

「違う！」

「！！」

「全部僕の無力さが……」

皆を守る力があつたら……」

チラッ コク

ジャックがクインティアをチラッと見ると  
クインティアはうなずいた

「スバル……」

パン

ジャックは勢いよくスバルの頬をたたく

「な、なにを!？」

「甘ったれてんじゃねーお前は

その程度の奴だったのか!？」

友達の為なら身を捨ててでも助ける!!誰よりも

あいつらと絆の深いお前が!そういう奴だろ!お前は!!」

「あなたのおかげでブラザーバンドそして

チーム、レゾンの素晴らしさを知ったあなたなら皆を助けられる!」

「……」

『スバル……』

「ジャック……クインティア先生……ごめん

僕は絶対皆を助ける!」

「それでこそスバル……いやロックマンだぜ」

「今こそ結ぶ時ね……ブラザーバンドを」

そして三人はブラザーとして繋がり

そしてロックマンの新たな戦いが始まる

## 第七話 新たな絆（後書き）

ヴァルゴ・・・貴様出番減らすぞ・・・根暗作者って・・・  
ヴァルゴ『キャハハハハごつめーんキャハハハハ』  
殴っていいですかーーーーー（怒）

## 第八話 200年の真実（前書き）

前回ジャックのキャラかなり変わってたな・・・

## 第八話 200年の真実

―― WAXA日本支部――

「そろったわね」

「しかしヨイリー博士本当にあのプログラムを？」

「ええそれしかないわ」

暁とヨイリーは小声で話すが

「？プログラムって何ですか？」

ミソラは歌手だけあって耳が良い

「ギクツ、い、いや何でも？」

（（（嘘だ！）））

暁の下手すぎる嘘に全員はなにかを理解した

「暁さん！何か分かったんですか！？」

「い、いや、えーと」

「もう話さない」

クインティアは暁が言い隠せないのを理解し暁に諦めるよう言う

「い、いやでも」

「話さない」ゴゴゴゴ

クインティアの委員長に匹敵するオーラを全員は見た

（怖い！）

（姉ちゃんを怒らせないでおう）

（ルナちゃんみたい）

（心なしかゴゴゴゴと聞こえる）

スバル、ジャック、ミソラ、ウォーロックの順だ

『キャハハハやっちゃえーティアー』

「わかった！話すよ！話せばいいんだろ！」

「じゃあ私が話すわ

まずEXEロックマンの説明ね……」

そこにヨイリー博士が名乗り出る

「あの何度も世界を救った200年前のヒーローですよネ？」

「あの電脳獣を倒したっていう」

ミソラとスバルだ教科書に乗ってることなので知ってて当然だろう

「その通りよ」

「でも電波技術が進んでネットナビは必要なくなったって」

「そのはずだった、だが」

Dr・ワイリーによりEXEロックマン含め

強力なナビ何体かが1つの古びた電脳で封印されていた」

『じゃあそれからずっと？』

「ああ、この事を知っているのはそのDr・ワイリーの子孫つまり」

「私だけよ」

「……えっ！？」「……」

衝撃の一言に暁以外全員だまってしまう

それもそのはずDr・ワイリーつまり三度世界征服しようとした

悪の科学者の子孫だと言うのだから

「でも今は、その話をしてる場合じゃないわ

実はその電脳には、その時代と今のバトルデータを読み込む力があるわ」

「……」

『？どういう意味だ？』

『つまり、昔のネットバトルと今のウェーブバトルが行なわれるたび

少しずつですがその電脳にバトルデータが入っていくわけです

わかりましたか皆さん……あっウォーロックも』

『なんで俺をわすれてんだ！』

「そしてその電脳からEXEロックマンは出てきて

そのバトルデータを盗んでしまった……っと思われるわ」

「………」「……」

話の壮大さと難しさに全員あぜんとしている

「スバルちゃん、ミソラちゃんこれを渡しておくわ」

ヨイリーのハンターから送られてきたプログラムにはこう書かれていた

スバルにはエボリュート PGM、ミシラにはピール PGMと

第八話 2000年の真実（後書き）

わかりづらくてすみません！

## 第九話 新PGM

ヨイリーにより新しいプログラム、

エボリユートPGMとヒールPGMをもらったスバルとミソラ・・・

・

「スバルちゃんに渡したエボリユートPGMはまだ秘密ね」

「私のはどういのですか？」

ミソラは手を上げて聞く

「ごめんなさいね、そこはまだ聞いてないのよ」

「聞いてない？」

『実は、コレを作ったのはヨイリー博士じゃないんですよ』

「じゃあ誰が？」

「そこは秘密なんだ」

「あ、あの」

ミソラは心配そうに口を開く

「ルナちゃん達はどうなってますか？」

「・・・記憶はまだ戻らないわそれと

ハンターを見てみて・・・」

スバルとミソラはハンターに目をやる

「！！！」

二人は信じられないという目でハンターをもう一度見た

スバル「そ、そんな！う、嘘だ！！」

なんと委員長達とのキズナリヨクが0になっていた

「ルナちゃん達の記憶を戻さないとキズナリヨクは戻らないと思うわ・・・」

「そ、そんな」

焦るスバルと違いミソラは冷静に

「スバル君・・・戦おうよ」

「ミソラ・・・ちゃん？」

「私知りたいなんでルナちゃん達がこんな目にあわなければいけないのか、  
タイソン君がなんであなったのか、そしてフィーリングスの目的を！」

「う、うん！」（ミソラちゃんとあのタイソンって人との関係って一体なんだろう）

「じゃ、始めるか！」

「なにを？」

スバルとミソラは息ぴったしに聞いた

「おまえら二人の特訓だ」

まずはハーブ・ノート対ジャック・コーヴァスだ」

第九話 新PGM（後書き）

ミス修正しました  
すいませんでした

## 第十話 ハープの怒り（前書き）

会話文ばっかですね・・・  
あとサブタイトル変更しました

## 第十話 ハープの怒り

- WAXA専用バトルルーム -

「いくよジャック君」

「・・・」

「「ウエーブバトル・ライドオン!!」」

- 数分前 -

「なんで私がジャック君と!?!」

「ん?簡単に言うとは修行だな

とにかくウエーブバトルして強くなる!!簡単だろ?」

「オオツいいじゃねーか!

バトルできんなら俺はOKだぜ!」

ウォーロック同様バトル好きのコーヴァスはテンションが上がる

「だろ!」

「単純ですね」

「なんだと!?!やるか?」

「ハハ・・・」

ミソラちゃん・・・」

少し間をためてからスバルはミソラに話しかける

「ん?」

「ジャックと・・・戦えるの?」

「・・・本当は嫌だよ

でも!!強くならなくちゃいけない

なら私はハープと・・・スバル君と一緒に強くなる」

「ミソラちゃん・・・」

そして二人のバトルが始まる

「グレイブ・クロー!」

ジャック・コーヴァスは紫の炎を連続で発射する



『  
ヒールPGM発動！  
』

## 第十一話 ハープ・ノートの進化

ピーーーーー

『ヒールPGM発動』

突如ノイズがハープ・ノートを包む

「な、なにこれ!？」

「ま、まさかこれは!ノイズチェンジ!？」

「関係ねえ!ーくらえ!エアロダイブ!ー!」

ジャック・コーヴアスがハープ・ノート

に向かって空中から突っ込んでいく

「終わりだ!ー!ー!」

「ミソラちゃーん!」

その瞬間

ハープ・ノートを包んでいたノイズが消え

「ノイズチェンジ完了ヒールノイズ」

「無駄だ!」

「バトルカード ブレイクサーベルX!」

ズバツ

「ぐわっ」

なんとあっさりハープ・ノートの攻撃が当たった

『ジャーーーーック!油断すんじゃないよ』

(いやジャックは油断なんかしてなかった

それよりも注目すべきはハープ・ノートのあの動きの速さそして・

・・)

「あ、あれ?傷が消えてる!？」

ハープ・ノートが傷が治っている事に気づくと

「グレイブクロー!」

ジャック・コーヴアスの不意打ちはハープ・ノートに  
・・・当たらなかった

「なに！ど、どこ行つた！？」

「ここだよ」

ジャック・コーヴアスが気づけないほどのスピードで  
ハープ・ノートは空中に避けていた

「アシッド？なにかわかった？」

「はい、彼女は電波変換すると体重が無くなるのは知ってますね  
そして今度は重力を極限まで削ってるのでしょ」

「重力を！？」

「正確には彼女に対する重力を削ってるのです」

「す、すごいや僕らでも追いつけないよねえロック」

「なんか気にいらねえがたぶん追いつけねーな」

『ミソラ、この力の使い方・・・わかったわ』

「くっそー」

ジャック・コーヴアスは血がのぼっておりそのまま  
ペインヘルフレイムを放つ

「なるほど、わかった信じるよ、ハープ」

ハープ・ノートは避けれるはずの

ペインヘルフレイムを避けなかった

「うううう」

『今よミソラ！』

「うん！」

その瞬間ハープ・ノートの傷が一瞬で治りそして  
「いくよ！NFB！！」

ハープ・ノートの頭上から巨大な丸い白い塊が現れ

「『いつけえー』」

ヒール・ホワイト・ホール！！！！」

## 第十二話 ハープ・ノートの進化（後書き）

ヒールノイズの姿はみなさんの想像に任せます

**第十二話 炸裂！NFB！！（前書き）**

タイトルミスりました

## 第十二話 炸裂！NFB！！

「『ヒール・ホワイト・ホール！！』」

ハープ・ノートの上に現れた巨大な丸い白い塊は  
ゆっくりとジャック・コーヴァスに迫る

「こんなゆっくりなら簡単に避けられ・・・って

あれーーーーー！！」

いつの間にか白い塊はジャック・コーヴァスの目の前だった

「なるほど最初はゆっくりだが」

『途中から重力を削ったのよ！』

「ハープ・ノート自身以外も重力を」

『変化できるだーーーーー！！』

そう言ってる内に白い塊はジャック・コーヴァスに

直撃・・・する直前に

「ちっ！」

白い塊はジャック・コーヴァスを包み

そして3秒後

白い塊は消え去りジャック・コーヴァスは

ボロボロになって落ちてきた

「ジャック！」

クインティアは心配し受け止めようとする  
と・・・

ガシッ

ハープ・ノートが既に受け止めていた

「もう終わりでいいですね？ 暁さん」

「そうだな」

ハーブ・ノートはジャック・コーヴァスを  
クインティアに預け電波変換を解くと・・・

フラッ

倒れてしまいそうになるがそこをスバルが受け止めた

「大丈夫！？ミソラちゃん！？」

「うゝん体力はあるほうなんだけどな」

暁は即救護班を呼んだ

『おいハーブ！！さっきの技どういのか教えろ！！』

ウォーロックはウィザード・オンして聞いた

『本当空気読めないわね』

『わたしも気になります』

『あなたも？』

『はい』

『じゃあ説明す・・・その説明は俺がしよう！』

ハーブの言葉を遮った男はこう名乗った

「オレの名はクロウ！ヒールPGMを作ったものだ！」

第十二話 炸裂！NFB！！（後書き）

やっと味方のオリキャラだー

## 第十三話 クロウ（前書き）

またミスりました

### 第十三話 クロウ

『誰なんだ!! てめえは!?!』

突然現れた少年にウォーロックは聞く

「だ・か・ら! ヒールPGMを作ったクロウ!」

『なぜあなたがここに?』

『アシッド! あなた知ってるの!?!』

『ええ命の恩人です』

「そこまでじゃないけどね~~~~~」

(完全に調子に乗ってやがる)

ウィザード3体と1人で盛り上がっていると

「さて後は救護班に任せてつと」

「いったいどうしたんでしようミソラちゃん・・・」

スバルはミソラの体のことを心配して聞く

「んゝたぶん初めてのノイズチェンジ

で体にかなり負荷がかかったんだだろうな

「・・・ん? なにしてるんだアシッド?」

『シドウ! 響ミソラはもういいのですか?』

「ああ・・・って、ん!?!」

「よおシドウちゃん」

クロウは暁をからかうように挨拶する

「な、なんでここに?」

「おめーからかったのに無視か!?!」

クロウはムスツとしながら聞く

「もう慣れたからな」

「あのう」

スバルは状況がつかめず質問しようとするが

「ああ、君が星河スバルだね?」

見事に遮られた

「だからあのう」

また質問しようとするが

「俺は、クロウー！15歳！好きな食べ物ハンバーグステーキ！好きな色は黒！好きな・・・」  
「だぁー！ー！ー！ーうるせー！ー！ー」

ウォーロックはあまりのうるさに声をあげる

『だいたいてめえ！スバルが質問してんのに・・・』

「ロック・・・もういいよ」

スバルの目は明らかに諦めていた

『クロウ博士そろそろあのNFBの説明を』

「博士はやめてくれない？」

『だぁー！ー！早く説明しろー！ー！ー』

ウォーロックはついに切れた・・・が

アシッドとハーブに取り押さえられる

「じゃあ説明すつか

いいか？ヒール・ホワイト・ホールは・・・

っていうかヒールノイズの説明だな」

「ヒールノイズの？」

スバルの返答をを無視しながら話を進める

「ヒールノイズは簡易的にノイズ率を上げられる

とでも言っておこうかな・・・あついちいち反応されるときりないから

ガンガン進めるよ？」

スバルたちが質問する前に遮り続ける

「簡単に言っと自分のダメージを

ノイズに変換して回復する・・・って感じかな

あと重力変化能力だな

・・・なんか質問ある？」

「じゃあ・・・はい！ないね！」

また質問を遮った

「じゃあ本命のヒール・ホワイト・ホール・・・だね

あれは自分のノイズ率の高さだけ威力があがる！以上！」

（（（本命超みじかつ）））

全員のツッコミが心の中でシンクロした

第十三話 クロウ（後書き）

クロウ・・・遮んの好きだな  
終わり方不自然なような

## 第十四話 エージェント

ハーブ・ノート対ジャック・コーヴァスの翌日

ここはWAXAの会議室

「遅いなクロウの奴」

暁がそう呟くと

ガチャ

噂をすればとはこの事タイミング良く扉が開き

「よお皆の衆！元気？・・・はい！元気だね」

ハイテンションのクロウが入って来たが

会議室の空気はどんよりしていた

（寝不足・・・）

（なんでだ？腹が痛い・・・）

（シドウ・・・おかしの食べすぎです）

（あの後疲れてるのに仕事あったし）

（あんな奴に負けた・・・）

（・・・・・・）

スバル、暁、アシッド、ミソラ、ジャックの順だ

クロウもその空気を察してか話題を作った

「さて！さっそくトレーニングだ！

まずロックマン！」

「あ、はい」

スバルのかなり気の抜けた返事にクロウは

「・・・・・・バトルカード ヘビードーン」

ハンターにバトルカードがインプットする（という感じの脅し）直前に

「はい！すいません！頑張ります！」

脅しが効いたようでスバルの眠気はふっとんだ

「じゃあ外に出て」

「トランスコード シューティングスター ロックマン」

青きヒーローロックマンが現れる

「敬語は嫌いだからやめてあと「さん」付けも」

「君」は語呂が悪いからやめて」

こんな会話が続けると

「ん？  
いい  
いい  
よ」

クロウのハンターから出てきたのは

「ああ？てめえなめてんのか！」

「ただのウィザードではないエージェントだ」

「ああ、わかった……」

「なんだ！？ノイズ率が上がってる！？」

エー  
ジェント・ソルジャー！！！  
『

## 第十五話 VS エージェント

『な！ファイナライズだと！？』

『ああ、私はファイナライズできる3体目のウィザードだ』

「ちなみにできたのは22XX年の1月1日

趣味は盆栽、特技は・・・『うるせえーーーーー』

ウォーロックはまた怒った

「あれ？1月1日？じゃあ半年前？」

ロックマンの疑問にクロウが答える

「うん」

ちなみに今は7月下旬

あとスバル達はもう小6です

『なぜメテオGがなくなっただのに

ファイナライズができるのですか？』

「説明だるいエージェントに任せた」

『デューラーアジトの大量のクリムゾン

それを使っている、まあファイナライズとは少し違うがな』

『そうですか』

そう盛り上がっていると

『だぁーーーーもういい早く暴れさせろ!!』

ウォーロックはそう言いながら腕を振り回している

「ロック・・・言ってる事悪役だよ・・・」

『だが同感だ・・・早く始めよう』

「あっ・・・そうだね」

明らかにスバルはこれはトレーニングの為のウェーブバトルなのを忘れていた

『忘れんなよスバル!!』

「ごめん」

「じゃあはじめよっか」

じゃ、頑張れエージェント」

『ああ・・・いくぞ』

『「ウェーブバトル！ライド・オン！！」』

「バトルカード ソードファイター！」

ウォーロックアタックで急激にエージェントに近づき  
連続切りをかまそうとした瞬間

『ハードナックル！』

エージェント・ソルジャーの拳がロックマンに迫る

「くっ！シールド！」

シールドで防ごうとするももろくもシールドは

あっさり破られハードナックルがロックマンに炸裂する

「ぐわーーーーー」

ロックマンは数メートルは吹っ飛ばされた

『ちっ・・・こうなったら・・・スバル！』

「うん！」

エボリユートPGM起動！！！！」

## 第十五話 VS エージェント（後書き）

スバル達の年齢言うの遅れてスイマセン

あとエージェントの変身は簡単に言うとなイズを使った電波変換って感じです

あと明日は更新できないと思いますスイマセン

## 第十六話 進化するロックマン (前書き)

昨日も更新できなくてすいません

- - - - -

こうなったら回想シーンというということです

そしてまた - - - - - ってなったら終わりです

わかりづらくてすいません

## 第十六話 進化するロックマン

「エボリユートPGM起動!!！」

- - - - -

『スバル!!エボリユートPGMについて調べたぜ!!』

「え!?本当!？」

『まあ調べたつてよりエボリユートPGMの方から語りかけてきたんだが』

ポリポリとウオーロックが頬をかくと

「語りかけてきたつて……」

「……どうのこと?」

スバルの疑問はあっさり『知るか!』の一言だ

「じゃあどんな力があるの?」

『へっ聞いて驚け!!』

- - - - -

「ウオオオオーーーーー」

「エボリユートPGMの力は確か

……あつそうだ!!

進化……だったっけ」

「進化?」

「どういうこと?」

「そのまんまだよ」

暁とミソラの二人の質問はあっさり返された

「あのPGMは、付けた電波体の強さを一段階上に

連れていくノイズチェンジをする……って感じかな?」

「？」

「まあようするに

ロックマンがさらに強くなる……ってとこかな」

「……………」

（だが相手はグレイブ・ジョーカーに

近い戦闘能力を持っている

勝てるのか？

ロックマン！！？）

『ノイズ率100%！！』

「ノイズチェンジ！！

イヴアルヴノイズ……！！！！！！」

強い光がロックマンを包み

その光が消えた時そこにいた

ロックマンは一瞬にして

エージェント・ソルジャーに近づき

バキッ

蹴りを入れる

『ぐわぁ！！』

クロウとクインティアを除き

全員が驚いた顔をしていた

ちなみにウィザードはアシッドを除く

『ブハハハハ見るスバル

あいつらすげーあんぐりしてやがるぜ』

「やめなよーロック」

ハープ怒ったら怖いって言ったのロックじゃないかー

あと他にも怒ったら怖そうな人多いし……ミソラちゃんとか……

「

最後の二行はボソツと言っていた

「なにか言っただけ？ ロックマン？」

「いえ何でも！」

なぜか恐ろしいオーラを感じ背筋が伸びるロックマン

なるほど……

中々やるな……ならば！これはどうだ！！！！

ハ  
ア  
ア  
ア  
――  


エージェント・ソルジャーの両手に

大量のノイズが集まっていく

「あ、あれは！」

「ジョーカーの・・・」

何度も見たことのある二人は察したエージェントのやるうとしてる技を

「グレイブメテオレーザー……!!」

ノイズの極太レーザーが

ロックマンに迫る

「いくよ!! ロック」

「オオツ！」

「ロッキンバスター」限界突破！！

オーバーチャージ！！！！

ロックバスター——！！！！

## 第十六話 進化するロックマン（後書き）

あんま台詞ないだけでクインティアやジャックは一応います  
わかりづらくてすみません

## 第十七話 疑問（前書き）

ミス修正しました

## 第十七話 疑問

『グレイブメテオレーザー!!!』

『オーバーチャージ!!!』

ロックバスター!!!!!!!」

二つのレーザーの衝突による爆風はすさまじく  
それに対応して電波変換したハープ・ノートやジャック・コーヴア  
ス達

ですら耐えられないほどだ

「ぐっ！」

「何・・・パワー・・・だ」

「凄いパワーだ」

『おまえこそ中々のパワーだ』

「でも負けない!!!うおおおおお」

『ならばこちらも!!!ハアアアアア』

二つのレーザーの威力が強まると

パチン

「「「「「!!!!!!」」」」」

突然の指鳴らしに全員が驚く

その瞬間二つのレーザーは消え去った・・・そして

「お疲れーはい!!!もう終了!!!」

いきなり明るい声でクロウが話しかけてきた

「「「「「・・・・・・」」」」」

「ちょ?なにこの沈黙?」

『てめえ!どうやって俺らのロックバスター消しやがった!?!』

ウォーロックのド直球な質問にクロウは

「簡単だよグレイブメテオレーザーとロックバスターの間に  
ノイズウェーブを作って……そこに通したってわけ」  
明るく簡単に説明され皆小声で

「そんな簡単にできることか？」

「つかそんな簡単にノイズウェーブって作れんのか？」

「あんな強力な衝撃波の間に？そんなことが……」  
それぞれの疑問を小声で

暁、ジャック、クインティアの順で呟くと……

「ん？可能だよ両方とも」

「……地獄耳だね」

『ミソラ……あなたもね』

「さーて今日のトレーニング終わり！！」

そして全員電波変換を解除し

WAXA内に入っていく

スバルも戻ろうとするとクロウがすれ違い様に

「エボリユートPGMにはまだ何か

秘密が残っているそれを見つけたものも

君の役目だ……ロックマン」

そしてすぐいつもの表情に戻りWAXAに入っていくクロウ

『おいスバル！！なにボーンとしてやがる！！』

「え、うん」

（エボリユートPGMの秘密？

いったい何なんだ？）

## 第十七話 疑問（後書き）

もうストックがなくなってきたのでこれからは2、3日更新になる  
と思います

もしかしたら早く更新できると思います

## 第十八話 喧嘩（前書き）

E X Eの話するとき「」なのには理由があります  
サブタイトルミスりました

## 第十八話 喧嘩

某所 某時刻

1人の男が苦しんでいた

「ぐっ!!」

「大丈夫か? EXE?」

心配してるのかタイソンがEXEに聞く

「ええ、大丈夫ですよ……」

フラフラになりながらも

立ち上がるEXE

「早く彼を手に入れなければ……」

「……」

I WAXA I

「あのうこれは一体?」

「若さっていいわね」

スバルの質問に返答した

ヨイリー博士の答えは実に納得がいかない

代わりに簡単に簡潔に説明すると……

「だからまだ早いの!」

「いや!! 急ぐべきだ!!」

暁とクロウが喧嘩していた

「何を喧嘩してるんですか?」

スバルの後ろからひょっこり現れたミソラが質問した

「二人共聞いてくれよ!!」

スバルとミソラに気づいた暁は

二人に話を聞いてもらおうとするが

「だーかーらー言うなって……」

クロウが止めようとするが

「実はー」

それでも話そうとする暁にクロウは

「バトルカード

キャノン×キャノン×キャノン！！

ギヤラクシーアドバンス！！ インパクター」

「わぁー！！！！

わかったわかった！！言わないよ！！」

クロウの脅・・・説得に暁も折れた

それもそうだギヤラクシーアドバンスを

ここで放たれたらかなりの損害だからだ

「「？」」

『アシッド・・・どういうことだ？』

星河スバル達に言わないと約束・・・

いえ、あなたの口の軽さは星河スバルから聞いています

言ったらすぐ星河スバル達に言ってしまうでしょう』

『うるせえーーーー！！！！

てめえおれの事どう見えてんだ！？』

『では言わないと約束できますか？』

『ああしてやる！』

『・・・・・・

やっぱり不安です・・・・・・』

『いいから早く言えーーーーー』

こんなコントしてると

「どうした？アシッド？」

『いえ何でも』

『あつてめえ！アシッド逃げんな！』

（あんま言いたくないよな

まっ！いつか言うけどでもまだ早い

言える訳が無い

奴らの・・・フィーリングスの居場所がわかったなんて）

## 第十八話 喧嘩（後書き）

今回ほんの少しだけ短いです

## 第十九話　フィーリンググロード

「俺らが喧嘩してから一週間・・・  
若いのは成長が早いね」

そんな事のにびりな事を言いながら

クロウはアシッド・エースとロックマンのバトルを眺めていた  
「インパクトキャノン!!」

ロックマンから放たれたキャノン砲は

アシッド・エースに命中する

「ぐう!!」

ダメージが大きく強制的に電波変換が解除される

「強くなつたな・・・ロックマン!!」

「はい!!」

電波変換を解除したロックマン・・・

スバルは強く返事した

「あれゝ私は? 暁さん」

暁「あゝ悪い悪いハープ・ノートもな」

「お疲れゝゝゝ・・・」

明るい言葉の後に急に黙るクロウ

「どうしたの? クロウ?」

「いやそろそろかと思つてね・・・」

「何が?」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

クロウも暁も黙ってしまった

『お前ら・・・なんかまずい事言つたんじゃね?』

「ええ!?!」

『大体お前らはたんじゅ・・・』  
ガクッ

ウォーロックはハープによって気絶させられた

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

結局全員黙ってしまった

『で、では私が話しましょう』

この空気に耐えられなくなったのか

アシッドが話し出したその時皆の心の声は

（（（アシッドナイス！！！！））））

『私のサーチ能力をヨイリー博士と

クロウ博士の作った遠隔サーチ強化システム

名づけて「遠くまで調べる君」で・・・・・・・・』

（（調べる君！？））

スバルとミソラは心の中でツツコム

『強化した私のサーチ能力で

サーチした結果・・・・・・・・』

ごくり

スバルとミソラは息ぴったしに唾を飲む

『フィーリングスの居場所がわかりました』

「！！！！」

「ほ、本当！？アシッド！？」

『ええ、しかし1つ問題があります』

「問題？」

「ああ奴らの居場所の入り口」

「その名もフィーリングロード

そこには強力なウィルスがウジャウジャいる  
それでも行くかい？」

ムクッ

ロック『聞くまでもねーよ』

回復したウォーロックが言つと

「僕らは……………」

「戦つて……………」

「「決めたんです！！！！」」

「そうかじゃあ行こうか……………」  
「ファイリンググロードに！！」

## 第二十話 キール・ドラゴ

「そうかじゃあ行こうか……」

フリーリングロードに!!」

クロウのその一言の直後

「大変よ!スバルちゃん!!」

珍しく大きな声で息を切らせて

ヨイリー博士が走ってきた

「どうしたんですか!?ヨイリー博士」

『なにか事件か!?!』

なぜかわくわくしてる

ウォーロックをヨイリー博士は珍しく無視して

「ルナちゃんたちが目を覚ましたわ!!」

「「「「!!!!」」」」

「本当かよ!?ヨイリー博士!」

「それで容体は!?!」

こちらにも珍しくクインティアが焦っていた

「大丈夫基本平気…….よ」

「ヨイリー博士?…….まさか」

勘の冴えてる暁は状況を察した

「ええ記憶は無いまま」

「…….」

スバルの沈黙にヨイリー博士は

「スバル…….ちゃん?」

するとスバルは

「よかった…….よかった」

静かに涙を流していた同様にミソラも

「ルナちゃん、ゴン太君、キザマロ君…….よかったよ…….グス」

そして医療室

「委員長、ゴン太、キザマロ!!」

スバル達が医療室の扉を開けた直後そこにいたのは

「よお待つてたぜ?」

「だ、誰!？」

突然の声にミソラは過敏に反応した

「おまえは確か白金ルナの言っていた」

「そうオレの名は星月 健太」

沈黙が続く中スバルは

「け、健太君!？」

「え、知ってるの?スバル君?」

「そりゃあ知ってるさだつて

従兄弟・・・だからな」

「な、どういうことだ、スバル」

「この前は気づかなかったけど

あの人は僕と小さい頃よく遊んでくれたんだ」

「まあ俺達が小3ん時俺は引越しまったけどな

まあそんな事はどうでもいい・・・スバル

今お前らに用はない・・・が!!

お前らは俺達の邪魔をするだろう・・・

悪いが消えてもらうぞ!!!」

健太はハンターを取り出し叫ぶ

「電波変換!星月 健太!オン・エア!」

灰色の光が健太を包み出てきたのは

「ふうーこれがキール・ドラゴだ」

「くっ ロックー!!」

「おつと俺は戦わないぜ?」

「どうということなの!?!」

「戦うのはこいつらだ!?!」

キール・ドラゴはベッドで寝ている委員長とゴン太を指差した

「どういう意味だ!?!」

「こついうことさ!?!」

委員長達に手をかざすと委員長達は

カッ

強い光に包まれた委員長とゴン太は

オヒュカス・クイーンとオックス・ファイアに変身していた

「始める二人とも!?!」

「ウオオオオオオオオオオ」

## 第二十話 キール・ドラゴ（後書き）

今回数少なくジャックとクインティアが話しました  
二人のファンの方いままで目立たなくてすいませんでした  
にしてもクインティアが焦ってるのは生徒が心配だから・・・か  
な？

いま何人「作者ならわかれよ！！！」って言ったんだろ？

## 第二十一話 オヒュカス・ホーン

「ウオオオオオオオオオ」

「そんなまた委員長とゴン太が暴走するなんて！」

「おーっと！それだけじゃないぜ？」

キール・ドラゴのその言葉と共に

オヒュカス・クイーンとオックス・ファイアの

影が徐々に混ざっていき

そして

再び強い光に包まれるとそこには

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「なんだ！？その姿は！？」

動揺している暁を無視しキール・ドラゴは何かを決めている

「まさにオヒュカス・ホーン・・・」

おーっと説明しておこうかこれは漫画風に言うと

融合・・・だな」

「ゆ、融合」

そこにウィザード・オンしたアシッドが

「聞いたことがあります」

電波体同士の融合・・・しかし

その実験で数々のウィザードが消えたとか・・・

しかし成功すれば強さは何倍にもなります」

「それだけで終わればいいがな」

聞き覚えの無い声と共に

キール・ドラゴの横に電波体が現れた

「てめえ！！ドラゴ！！！」

「久し振りだな・・・ウオーロツク」

「あなた・・・何故ここに！？」

「おいおい慌てんなまず・・・」

自己紹介から……だろ？」

『ちっ』

『俺は、ドラゴ……FM星人だ』

『やばいぜジャック……』

『どうした！？コーヴァス』

『あいつはねFM星人の王族なの』

『王族……ということは』

コーヴァスとヴァルゴはドラゴ強さを皆に説明しスバルが結論を言った

「ケフェウスに近い強さを持っているって事だね……」

『そういうこと……さてそろそろ』

説明に戻るうか……』

『勝手にしろ!!』

『いいか？電波変換てのは』

電波体と人間の融合だ……まあ

人間の代わりにできる電波体もいるが

……しかし！

重要なのはシンクロ率だ』

「シンクロ率!？」

聞いたことの無い単語にスバルは声を漏らす

『簡単に言つとどれだけシンクロしたかだな』

そのシンクロ率の高さ〃強さだ』

「そのシンクロ率を無理矢理ほぼ

100%してなおかつ融合……つまり」

『めっちゃくちやつえーってことか』

「じゃ俺らは帰るか……じゃ!!」

キール・ドラゴは一瞬でどこかに行ってしまった

「待て!」

『無理だもう追いつかねえよ』

「くっ」

「キシャアアアアアア」  
「まずこいつをどうにかするぞ、いくぞ!!」  
「」「」「トランスコード!」「」「」  
「ハープ・ノート!!」  
「アシッド・エース!!」  
「ジャック・コーヴァス!!」  
「クイーン・ヴァルゴ」  
「シューティングスターロックマン!!」

## 第二十一話 オヒュカス・ホーン（後書き）

レッドスター先生とのコラボが決定しました  
レッドスター先生よろしくおねがいします  
コラボはまだ結構先だと思います

## 番外編 質問コーナー

作者「はいどもー作者のうしせんぱいで~~~~~す」

クロウ「どもー！皆大好き

クロウで~~~~~す」

ロック「な、ここはどこだ!？」

スバルは!？オヒユカス・ホーンは!？」

作者「おちつけYO」

クロウ「オオツムーン・ディザスターみたい」

ロック「このハイテンションうぜーーーーー」

作者&クロウ「そうでしYOW」

ロック「うぜーーーーーんだよーーーーー」

作者「では改めまして~~~~~

今回は番外編です」

ロック（こいつどうせ○先生の番外編見て書いたんだろ

しかもそこまで改まってねえし）

クロウ「ロック聞こえてるよ」

ロック「な、なぜ!？」

作者「ふっふっふ今君達はえーと・・・作者ゾーンにいるからだ」

ロック「今考えたな」

作者「とにかく!作者ゾーンにいる奴は

心の声がきこえるのだびよ」（やべっ!噛んだ!）

ロック「あっそういうことか」

クロウ「まあこのゾーンも○先生のパクリみたいなもんだけど」

作者「パクってなーーーーい!!!断じて!」

クロウ「さーて質問コーナーに行こうか」

作者「無視かよ!」

「質問コーナー」

クロウ「さて今回は読者様が思ってるであろう質問を回答していきます」

ワーワーパチパチ

ロック『いや2人しかいねえーし拍手してんの』

作者「うるさいバトルマニア」

ロック『なんだとゴラア「さーてさっそく最初の質問!」」

作者「さすがあいかわらずの遮りだなクロウ」

クロウ「えへ」

ロック『かわいくねーんだよーーーーー』

作者「最初の質問はコレ!」

「オリキヤラの顔を教えてください」

クロウ「あれ?今読んだのミソラちゃん?」

作者「その通り!みんな喜ぶからなこの子だせば」

ロック『お前だる喜ぶのは夢に出てきたくせに』

作者「あれは偶然だよ」

大体アレはただのロックマンのゆ「はい!早く答える!」

作者「はい

えーとクロウは

バ○マンの劇中作C○O○Mの髪を下げて目をたれ下げて常に笑顔です  
で、タイソンはオールバックの目のつり上がったの鼻は高い

星月健太はイナ○マイレブンの半○みたいなかんじで

ホープとピアノはまだ教えない」

クロウ「俺本当に「やめろーーーー著作権がーーーー」」

ロック『大丈夫か?この小説……』

作者「ちなみに質問は募集中ですただふざけて書けなかっただけです」  
(文章の長さの問題ですが)

番外編 質問コナナ（後書き）

章の入れ方がわかりませんどなたか教えて下さい

詳しい入れ方、入れた後も教えて下さい

クロウ「駄目な作者だね」

作者「みなさん、こんな作者ですがよろしくお願いします」

## 第二十二話 最強！オヒュカス・ホーン

オヒュカス・ホーンの前に五体の電波体が現れる

「いくぜ！」

さっそく突っ込んだのはジャック・コーヴアスだった

「グレイブクローー！！」

紫の炎がオヒュカス・ホーンに向かって飛ぶ

「オオオオオオオオオ（サーペントタツクル！！）」

オヒュカス・ホーンは紫の炎を打ち消しながら突進する

「は、早い！避けて、ジャック！！」

ロックマンがそう叫ぶが

「へっ無駄だ！！フェザーシックル！！」

ジャック・コーヴアスは鎌のようなもので切り裂こうとするが

「ブオオオオオオオオオ」

さらにオヒュカス・ホーンのスピードが上がり

ドゴッ

「グワアッ」

『グハアー』

ジャック・コーヴアスは何メートルも

吹き飛ばされ電波変換が解除され

「く、くそ」

ジャックは気絶してしまう

「「ジャック（君）！！？」」」

「・・・く・・・くそーーーーー」

ロックバスターーーーーー」

ロックマンはバスターを放つも

オヒュカス・ホーンのスーパーアーマーの前には

効かなかったそして

「オオオオオオオオ（パンチング）」



## 第二十二話 最強！オヒュカス・ホーン（後書き）

今回少し短いです

あとちゃんと読めますか？

読みづらかったら変えますので

あとラストジャッジメントってどうか聞いたことあるような・・・

・

一応パクってないので「パクリだー」とかいうのはやめてください  
長々と後書きで話してスイマセン

## 第二十三話 ラストジャッジメント（前書き）

今回少し短いです

## 第二十三話 ラストジャッジメント

「ラストジャッジメント!?」

アシッド・エースの言うラストジャッジメントという単語に

ロククマンとハーブ・ノートの頭の上には?マークが何個も出ていた

『シドウ……ここで使うのですか?』

「ああ」

『しかしこれは、シドウへの負担が大きい』

「でもやらなくちゃならない

これ以上仲間が傷つくところをみたくない

それに奴が牛島ゴン太と白金ルナの体だとしても

ティアを……二人を傷つけた事は許せない!!!」

『シドウ……』

いつも穏やかな暁を知っているアシッドだからこそ

暁を……アシッド・エースを止める事はできなかった

「暁さん……僕」

「わかってる」

「……」

暁さん!

「ん?」

大きな声でアシッド・エースを呼ぶハーブ・ノート

「私……暁さんとスバル君とルナちゃんと

ゴン太君とキザマロ君とジャック君、クインティアさんと……

皆と

また笑っていきたいんです……だから」

「ああ、絶対二人を助ける」

『……!……シドウ!』

「どうした、アシッド」

『牛島ゴン太と白金ルナ体はもう限界です!』

「そうか、わかった

行くぞ！ラストジャッジメント！！！」

するとアシッド・エースはロックマン達、オヒュカス・ホーンにも  
見えないスピードで

ゴオオオオオオオオ

ズバンッ

一瞬でオヒュカス・ホーンを切り裂いた

## 第二十四話 新しいレゾン

「委員長！ゴン太！」

アシッド・エースのラストジャッジメントにより

オヒュカス・ホーンの合体は解除され電波変換も解除された

委員長とゴン太のところにロックマンが走る

「ぐっ」

「うっ」

「気を・・・失っているだけだ」

ボロボロのアシッド・エースは電波変換を解除しそう言った

「ハープ・ノート・・・ティアとジャックとこの二人の手当てを  
たの・・・む」

そう言い暁は気絶した

「暁さん！！」

数時間後

ー会議室ー

「それじゃ状況を説明してクロウちゃん」

「はい」（といつてもスバル達から聞いたただけだけど）

そんなクロウの心の声が聞こえるわけも無く説明する

「えーとまず現日本最高の戦闘力を持つ

クインティアこと、クイーン・ヴァルゴと

ジャックこと、ジャック・コーヴァスと

暁シドウこと、アシッド・エースは負傷」

「暁さん達は無事なんですか！？」

「まあ二週間もすれば完治するはずさ」

スバルの質問にクロウは冷静に答えさらに続ける

「一応ミソラちゃんが治療って言つか・・・回復・・・してたんだけど」

「電波変換時に受けた傷は元の肉体の状態ではそう治らないのよ」  
『？さっぱり理解できねーんだが』

「あらあらロックちゃんには難しかったかしら？」

「そつえば私もそついう話が理解できない時が……」

「ウオッホン」

いつものヨイリー博士の過去話が始まるのを長官が阻止した

「それとスバルちゃん、ミソラちゃん……」

「一つ大切なことを伝えなくちゃならないわ」

「大切なこと？」

「実は……」

長い間をためヨイリー博士が口をあけると

「私たちは今回の闘い……協力できそうに無いわ」

「えっ!？」

「それってどういうことですか!？」

「それは……」

「ヨイリー博士……私が説明しよう」

「長官……」

「いいかスバル君……今我々の……日本の最高の戦闘力を持つ電波変換体の五人のうち三人が負傷そして残り二人も戦闘へそうなれば日本がもし他国に狙われでもしたら……日本は……」  
「こぶしを強く握り締めながら長官は説明する」

「じゃあ……」

「じゃあ委員長たちをあきらめろって言うんですか!？」

「そうですよ!なんでルナちゃんたちを……」

スバルの講義にミソラも乗っかる

「おっちつけ!」

「パアアン」ぶっ」

「なんといきなりクロウはスバルをハリセンで叩く

「な、なにをするの、クロウ!？」

「だってさあゝ皆超が付くほどネガティブじゃん

大体さあゝWAXAにはまだバトルウィザードがいるしさゝ

つか電波変換体を頼りすぎだしゝ

つかスバル!」

長い愚痴(?)のあとと呼ばれたスバルは

「な、なに?」

「お前・・・俺たちを忘れてね?」

「え?」

「だゝかゝらゝ俺とエージェントを忘れてね!?!」

「あつそついえば!」

「コノヤロ」

「え?じゃあ」

「イエス!俺たちも協力するよ」

「ちょ、ちよつと待ちなさいクロウ君、君は」

長官の反論にクロウは

「あれ?俺いつWAXAに入るなんていいましたっけ」

「ぐっ」

「長官・・・行かせて上げましょう」

「しかしヨイリー博士」

「安心してくださいクロウちゃんは強いわ

それに入人を助けるのがサテラポリスの仕事よ」

「・・・そうですな

スバル君、ミソラくん!」

「「はい!」」

力強く返事した二人に長官は

「これがサテラポリス遊撃隊の新しいレゾンだ

・・・

皆を助けて帰ってくる・・・だ  
「はい！！」  
スバルたちのレゾンが変わった

## 第二十四話 新しいレゾン（後書き）

次は2日後ぐらいに更新です  
終わる方不自然な気が・・・

## 第二十五話 新たな仲間（前書き）

昨日更新するはずができませんでした  
すいません！！

あとレッドスター先生の許可をもらって  
レッドスター先生が出てきます

「は？なにいつてんのこいつ」

見たいな感じなこと思わないで見てください

あと――――――――――が出たら

回想シーンもう一回――――――――――

ってやったら回想シーン終わりです

長々話してスイマセンごゆっくり読んでください

## 第二十五話 新たな仲間

オヒュカス・ホーンとの闘いの翌日

ーコダマタウンー

AM5時

まだ太陽も出たばかりの時間

静かに星河家の玄関が開き

スバルとウォーロックが出てくる

『・・・どした？スバル？』

「え？何が」

『いやいつものお前なら寝坊すると思ったからよ』

ウォーロックの嫌味にスバルは

「そんなことしてられないよ

皆を助けるんだから」

『そうだな・・・にしても

スバル・・・お前・・・』

間をためながらウォーロックは話す

「今度は何？ロック」

『いやお前が大吾に似てきた気がしてな』

「そう？」

『ああ・・・にしても寝みいー』

眠くて当然だろうこんな時間なのだから

さてなぜスバルたちがこんな時間に

家を出たかというと

- - - - -

「んじゃ明日5時ぐらいに来てね」

明るく言うクロウにスバルは恐る恐る聞く

「それって午後？午前？」

クロウは親指を立てながら自信満々に

「午前！！！」

「「ガーン」」

スバルとミソラのショックは大きかった

「ちょ、ちよつと待った僕結構寝坊多いんだけど・・・」

「寝不足お肌に悪いからダメって

マネージャーに言われてるんだけど」

「そうもいかないのよ」

ヨイリー博士は二人の説得に入る

「敵も人間・・・眠気の一つや二つあるわ

眠気は戦闘では特にあってはいけないもの」

「な、なるほど」

「あとはつきり言うところイヴアルヴノイズとヒールノイズ  
を使っても勝てるかどうかわからないし・・・」

「はつきり言つてどれくらい強いのか？」

ヨイリー博士の話に納得しクロウの脅し(?)

を聞き恐る恐る聞くスバルにクロウは

「グレイヴ・ジョーカー以上かもね

E X Eにあのデータがある限り・・・」

「あのデータってE X Eが盗んだデータの事？」

「さっすがミソラちゃん！！お察しの通り！」

「でもそれが何の関係が？」

「・・・そのデータは持つものをそのバトルデータの分だけ  
強くする事ができる・・・それを他の者につつせたら？」

「「・・・・・・・・」」

「まっようするに敵はめちゃくちゃ強いってこと」

「でも助けるんだろ？仲間を」

いきなり赤髪の男が現れスバル達に問う

「あっおひさーレッドスター先生

作者に代わって挨拶しまーす」

クロウのギリギリ禁止用語にレッドスター先生は

「おいおい作者とか使っちゃ駄目だぞクロウ

あっそろそろ回想シーン終わりだよー」

「あんたも禁止用語つかってんじゃない!!」

思わず敬語を忘れたスバルだった

- - - - -

I W A X A I

「さて全員揃ったしいくよ!」

「電波変換!!」

## 第二十五話 新たな仲間（後書き）

次回はレッドスター先生とクロウの電波変換をやる……かも  
です

第二十六話 電波変換！クロウ&レッドスター オン・エア！（前書き）

今回少し短いです

## 第二十六話 電波変換！クロウ&レッドスター オン・エア！

二つの光が消えるとそこにはロックマンとハーブ・ノートが立っていた

「よしっ行こう！」

「……スバル君」

少し間をためながらハーブ・ノートはロックマンに聞く

「なに？」

「フィーリンググロードってどこにあるの？」

「……」

完全に分からないという事だろうこの沈黙は

「いやえーとたぶん電波変換したし電波空間だと思うけど」

「違うぞー！」

「ガーン」

力強くレッドスター先生は否定しスバルは軽くへこんだ

「じゃあどこなんですか？」

へこんでるロックマンを気にせずハーブ・ノートはクロウに聞く

「ノイズウェーブだよ」（てかスバル無視！？）

クロウは心の中でツツコミながらスバルに同情した

「ノイズウェーブって私ノイズウェーブには入れないし

クロウ君やレッドスターさんも」

「ミソラちゃん……レッドスター先生って呼んであげて

一応うちの小説より評価もいいし週間アクセス多いんだよ？」

（（だからそういう禁止用語出していいのか！？））

スバルとミソラは同時に心の中でツツコム

「まあミソラちゃんはヒールPGMがあるし

そして、俺とレッドスター先生は……」

クロウはレッドスター先生の方をニヤリと見て

レッドスター先生はコクツと頷く

「いくぞ！クロウ！」

「はい」

二人は息を合わせてこう言った

「電波変換！クロウ／レッドスター オン・エア！！」

「えっ！？」

『電波変換だと！？』

ロックマンとウォーロックが驚いている間に

二つの光は消えた

「ふうやっぱ電波変換すると体が軽いねえー」

「まあ二回目にしては上出来じゃのう」

「ふ、ふたりが電波変換ができたなんて・・・」

（（てか何キャラ！？））

今度はレッドスター先生にツツコンだ

その後もクロウとレッドスター先生がボケ

ロックマンとハーブ・ノートはツツコムが続き

そして

「そういえばまだ名乗ってなかったね」

クロウがボケをやめ自己紹介を始めた

「俺はブルース・クロウ」

「んじゃ俺も、俺は

レッド・エージェントだ」

「え？エージェント？ブルース？」

「エージェントはクロウ君のじゃ？」

「詳しいことは次回教えるよ」

（（（だから次回とか使うな！！！！）））

今度はウィザードも含めてツツコンダ

**第二十六話 電波変換！クロウ&レッドスター オン・エア！（後書き）**

一応ノイズウェーブも電波空間ですが

レッドスター先生は「普通の電波空間ではない」と言いたいのではないかな

## 第二十七話 突入！フィーリングロード！！

「さて次の話になった事だし説明するか！

エージェントは元々この俺！レッドスターのウィザードなのだ！

そしてブルースとは200年前に存在した最強クラスネットナビ  
それを真似て作ったウィザードを電波変換できるようにした！

以上！！」

「『』今回の話に引つ張ったのに約三行で説明終わった！『』」

「さっすがレッドスター先生！うちの小説より人気あるだけあるね

ー」

「『』『』……『』『』」

ついにツツコムことすらやめてしまった二人と二体だった

「さーて……行くよ！」

ブルース・クロウはゆっくりWAXAのウェーブライナーの近くに  
歩く

そして壁<sup>そこ</sup>に手をかざす

すると

そこにモザイクのような裂け目が現れる

「さっ行くよ！」

そしてロックマン達はノイズウェーブを進む

そして

「で、出口だ！！」

ロツクマンに続き他の電波変換体達は出口から外に出る

そこには虹色に輝く空へ繋がる道があった

そしてそのまま上って行くと

ウイルスが現れた

「なんだ！見たことの無いウイルスだ！？」

「ここにはそんなのがウジャウジャいるよ」

「とにかく倒すぜ！アダプターカード

レッドキャノン！」

レッド・エージェントの右腕からキャノン砲が放たれウイルスをデ  
リートする

「あつめんどいから早く説明すると

アダプターカードは本来違法の改造バトルカード」

進みながら説明するブルース・クロウ

「い、違法！？」

「そう使うとウィザードの負担及びノイズ率が急上昇するから  
でもまあ今は好都合かも

んじゃノイズチェンジ頼んだバカップル」

「カ、カップルって……」

「バはいらないよ、クロウ君」

「なんで「バ」だけいらねえーんだ？」

「あんたには一生わかんないわよ」

「なんだとー……」

「早くノイズチェンジしろー」

いくら別の小説の作者といってもきついんだぞー！」

（（（小説とかホント使っているのか！？）））

また二人と二体でツツコムそして

「ノイズチェンジ！！！」

周りのノイズが二人を包む

そして

「イヴァルヴノイズ！」

「ヒールノイズ！」

すると四体の強力な電波変換体の放つ電磁波の影響で

「ウ、ウィルスの大群だぁー！ー！」

ただでさえ屈強なウィルスが何十体も現れた事を

レッド・エージェントが大声で伝える

「んじゃあ皆！」

各々強力な技を叩き込め！」

クロウの指示で全員が構え

「グレイブメテオレーザー！」

「インパクトキャノン！」

「パルスソング！フォルテシモ！！！」

「オーバーチャージ！ロックバスター！！！」

## 第二十七話 突入！フィーリングロード！！（後書き）

今回通らしたノイズウェーブは3の裏シナリオに使われたところです  
あと今回「そして」が多い・・・

あとブルースはソードばかり使うのでGAを使っただけ

ハーブ・ノートはとりあえずアニメで使ってた（？）技をやらせました

## 第二十八話 再会！？

「グレイブメテオレーザー！」

「インパクトキャノン！」

「パルスソング！フォルテシモ！！」

「オーバーチャージ！ロックバスター！！」

まず赤い極太レーザーがウィルスの軍団を倒しながら道を開け  
インパクトキャノンもウィルスを多く倒し

音波のような攻撃は残ったウィルスの動きを止め

最後はロックマンのバスターで一掃された

そしてロックマン達はフィーリンググロードを駆ける

道の途中突然4人を光が包む

「うわぁ」

「きゃ」

「うおおお」

「うひぁー」

ロックマン、ハープ・ノート、

レッド・エージェント（先生）、ブルース・クロウの順だ

体を包む光が消えるとそこはディーラーアジトのような場所だった

「ここが」

「フィーリングスの」

「アジトだよ」

「広いな！」

ここはレッド・エージェント（先生）

とブルース・クロウの順番が逆になったただけだ

「い、委員長達の「いま調べてる」」

エアデイスプレイを操作しながらロックマンの言葉を

ブルース・クロウは遮る

「出たよ」

エアデイスプレイに地図が映される

「け、結構単純な地図だね」

「よし早く行こう!」

「・・・・・・! 待て!」

ブルース・クロウに突然言われるがロックマンは一步踏み出してしまった

ウーウーウーウー

「しまった!!」

「な、何!? 一体!？」

「恐らく警備システムだろうな

・・・・・・クロウ!!」

「OK

スバル! ミソラちゃん! 右の奥の部屋に行け!

そこに白銀ルナの記憶がある!

牛島ゴン太と最小院キザマロはこっちに任せる!」

いつになく真剣なクロウにロックマンたちは押され

奥の部屋へ向かって走る

そして

扉を開けるとそこには

「やはり来たか・・・・いつか来るとは思ってたよ」

星月健太が立っていた

「委員長を・・・・僕らの委員長を返して!!」

「・・・・・・会いたきゃ会わせてやるよ」

パチン

すると健太のハンターから委員長が出てきた?!

「!!!!」

## 第二十九話 二人の敵

「委員長!!」

「ルナちゃん!なんでここに!？」

『いえ!よく見て!あれは』

ハーブが実体化しながら話し続ける

『あれは・・・ウィザードよ!』

「ご名答」抜いた記憶をこの「白金ルナ」という  
もう1つの器に入れたのさ」

「う!」

「器つて」

『そんな簡単に作れるものなのか?』

「まあ普通は無理だけど・・・」

まあこの話は後でな

さてせつかくの再会だ

存分に話しな」

『スバル君・・・ミソラちゃん・・・』

「委員長!」

「ルナちゃん!」

『・・・そ・・・い』

「「えっ?」」

『もぉーーーー遅いわよ!!』

どれだけ待たせるのよ!』

「「・・・えっ?」」

突然怒鳴られ思わず間拔けな声を出してしまう

『相変わらずだな』

『なによ!文句あるの!？』

ウォーロック!？」

「よかった……」

『え?』

ロックマンの呟きに委員長も間の抜けた声を出してしまう

「委員長が無事でよかった……」

「うんよかった」

二人は半分泣きながら笑顔を作りながら言う

『ところで……』

ここはどこなの?』

「えっ委員長、覚えてないの!?!」

『ええ』

何か長い間眠っていたような』

「さーておしゃべりはやめよーか」

『!……健太!なにをするつもり!?!』

「電波変換」

カッ

「さて決着……付けよーか」

「待て」

「『!』『!』『!』」

シャッ　ズウン

鋭い音共に扉が  
切れ倒れる

「タイソンか……」

「星月……」

あいつは……ハープ・ノートは俺の相手だ」

「!タイソン君!」

「ミソラ・・・悪いが倒させてもらっぞ!」  
「こうなったら行くよ!」  
「ウェーブバトル!ライド・オン!」

## 番外編其の？料理対決

作者「お久し振りダニーーーーーー」

クロウ「ダニーーーーーー」

スバル&ミソラ「初めからパクリ!?」

作者「だくから」

パクってなーーーーーい」

クロウ「ちなみにさっきの挨拶の元になったのは

十五年くらい(?)前にやってたポ○ビの・・・「やめろー

ーそれ以上はーーーーー」

ミソラ「はい今回は番外編です!ちなみに書き方が戻ってるのは」

作者「それは俺が・・・

だるいからさ!」

スバル&ミソラ「駄目だこの人!!!」

作者「だまらっしやい!!バカップ「さくって本題に入るーか」

ロック「やっぱクロウの遮りうぜえ」

「「「(ウオー)ロック(君)いたの!?」「」「」

ロック「・・・」

スバル「あつへこんじゃった」

ミソラ「ごめんねロック君」(・・・あれ?ハープいないの?)

クロウ「ねー早く本題・・・」

ロック「オメーは血も涙もねーのか!?」

クロウ「あるよ!!」

ロック「はつきり返すな!!!」

作者「はいこのままじゃ俺まで暴走するので本題に入りまーす」

本題タイトル「かわいいからって料理がうまいとは限らない」

「『なにこのタイトル！？』」  
作者&クロウ「そのまんま」

「『……………』」

作者「と！言うわけで、

今からスバル、ミソラ、クロウ、ウォーロックには……………」

デレレレレレレレレ……………」

デン！

作者「料理対決をしてもらいまーす」

「『えっ！』」

クロウ「今日ホント3人共息ぴったしだね」

スバル「ぼ、僕料理とかした事ないよ！」

クロウ「俺は得意だよ」

ロック「俺食うことも出来ねーんだけど……！」

作者「大丈夫作者の力で食えるようになってるから」

ミソラ「……………」

スバル&クロウ「ミソラちゃん？」

ミソラ「この勝負私の勝ちだね」

私の趣味は料理だよ！」

スバル「そうなの！？」

クロウ「知らなかったの？スバル？

流星2のホームページに行けば載ってるよ？

ちなみに誕生日は8月2日（ハープの日）で

趣味は歌う事、料理、

好きなものは……」

「『もっいいいわ……！』」

クロウ「あれ？今作者もツツコンダ？」

作者「気のせい気のせいさて料理のお題は

「・・・・・・・・カレーライスだぁー」

「（（（うわ~~~~ベタ~~~~）））」

作者「おいお前ら作者ゾーン忘れてねーよな？」

クロウ「さーて作る〜と」

ミソラ「まず材料は〜」

スバル「え〜とえ〜と」

ロック「ウオリヤアーーーー」（ビーストスイングで具材をぶった切ってる）

作者「無視かよ！！！」

「数分後」

スバル「できた！」

クロウ「できたよ〜」

ミソラ「できた」

ロック『できたぜ！』

作者「普通数分でできるか？おい」

試食ターーーーーイム

作者「まずはスバル！！」

スバル「どーぞ」

作者「（パク モグモグ）・・・・・・・・ふ」

「「「ふ？」」」

作者「普通だぁーーーーー」

美味くも！不味くもない！！！！」

スバル「・・・・・・・・」

作者「次！クロウ！！」

クロウ「喰らえ」

作者「いやこえーよ言い方

(パク モグモグ) おっ！美味しい……………のか？」  
「……のか？」

作者「お前ら息合いますぎ……………このカレー  
美味いと事マズイとこが均等にある！

ある意味すげー……………」

ミソラ「次は？」

作者「楽しみは最後に取つとくのでウォーロック！」

ロック『なんかバカにされた気分だ』

作者「早く出せ！」

ロック『オラよ』

作者「……………見た目がすげえーグロイ……………(パク ガリバキッ)  
おっ！

ウギヤア……………」

( ( ( 噛んだ音がおかしい！ ) ) )

作者「死ぬかと思った……………」

ロック『……………そんなにまずいか？(パクッ)』ドサッ

クロウ「さあ最後はミソラちゃんだあ……………」

作者「食うのは俺だけ……………おっグリーンカレーかあ」

ミソラ「はい！あまり野菜を食べないと思って！」

作者「なんかム力つくけどまあいいか

(パクッ)……………」

ミソラ「あっスバル君達も食べる？」

スバル「あっ、うん」

クロウ「食べる食べる♪」

(パクッ)

( ( ( フ、フニヤフニヤの野菜に、

ドロッドロッのルー(？)が口の中を通る

こ、これは！ま、不味い…………… ) ) )

ドサッ ドサッ ドサッ

ミソラ「なんで!？」

ミソラ以外倒れたので終了です

## 番外編其の？料理対決（後書き）

ウォーロックの作ったカレーはとんでもない恐怖体験だ

（見た目のグロさは作者の見てきた料理で最高クラス）

グリーンカレーは作者は食べた事無いので良くわかりません

クロウは流星2のミソラのプロフィールに料理の味は微妙を見てなかったようだ

### 第三十話 奇襲！ノイズチェンジ！！（前書き）

あらすじ！フィーリングスののアジトに突入！

そしてロックマンとハーブ・ノートはタイソンと健太と戦うことに

．．．．．わかんなかったら前々話見てください

### 第三十話 奇襲！ノイズチェンジ！！

「ウェーブバトル！ライド・オン！！」

その掛け声と共にロックマンはキール・ドラゴへ向かって走り

ハープ・ノートはタイソンへ向かって走る

「ロックバスター！」

「スラッシュキール！」

ロックマンの放ったバスターをキール・ドラゴは切り裂く

「シヨックノート！」

「フンッ」

ハープ・ノートの放った音符のような攻撃はタイソンに向かって飛ぶが

タイソンの手に電波の剣が出現しそれを盾にし

ハープ・ノートの攻撃を防ぎハープ・ノートの方へ走る

そのスピードは電波人間の比だ

「っ！嘘！電波変換してないのに」

そう彼は電波変換してないのだ、いやしてなくはない

「今俺は仮電波変換状態だ」

以前キール・ドラゴが説明したシンクロ率……

電波変換に電波体が必要としないタイソンには

シンクロ率が存在しないその代わり

電波変換のレベルを分けて電波変換できるのだ

「今の俺はレベル1ってとこだな」

「よ、余裕だね」

今の説明の間にも戦いは続いており

ハープ・ノートは3度タイソンに切りつけられていた

「ミソラ……おとなしく俺らの計画に加わってくれ……」

「何をするかわからないけどタイソン君たちは

ルナちゃん達を奪ってスバル君を悲しませた

許せないよ……………  
だから……………」

「……………!」

突然ハープ・ノートと体のノイズが包み……………  
「バトルカード ソード!」

ヒュッ ズバツ

目にも留まらぬ速さでタイソンを切り裂く

「ぐっ……………それが噂に聞く

ヒールノイズか……………」

「!どうしてそれを!」

「俺らの情報網はサテラポリスの比じゃないからな

……………確かヒールノイズは重力を操るノイズチェンジ……………  
……………そうだな俺も少し本気を出すか……………」

カッ

突如タイソンをイナズマが包む

「うっ!」ビリビリ

ベルセルク・タイソンの恐らく戦場でしか感じれないであろう  
殺気と威圧感でハープ・ノートは後ずさる

「オールスラッシュ!」

「ぐう!」

ロックマンもキール・ドラゴの攻撃で後ずさり  
ハープ・ノートと背中合わせになる

「ミソラちゃん……………」

「大丈夫」

「そつえばあの時の俺達もお前らみたいにそうやって  
背中を合わせて戦ったよな」

「・・・・・・・・」

ベルセルク・タイソンの言葉にハープ・ノートは押し黙る

「ミソラちゃん……」

あの人となにがあつたの？」

「そ、それは」

「いいぜどうせなら話してやるよ」

「なんだあ？俺黙ってたほうがいいか？」

スバル、ミソラ、タイソン、健太の順で話し

そしてタイソンの話が始まる――――――

### 第三十話 奇襲！ノイズチェンジ！！（後書き）

残酷描写必要な？

さて次回からついに本当の過去の章ですよ

ただ次の更新は一週間ぐらいかかるかもです・・・

### 第三十一話 ミソラとタイソンの過去其の1（前書き）

基本タイソン視点で話が進みます

回想シーンの間はタイソン以外のキャラは「」で話します

回想シーンのキャラは^^で話します

あと.....こうなったら回想シーンの始まり

また.....ってやったら終了です

あと今回短いです

### 第三十一話 ミソラとタイソンの過去其の1

「あれは今からたった五年前の事だ」

「・・・・・・・・」

- - - - -

俺はムーの末裔として生まれた

「・・・・・・・・」

「おいそれってようするに」

ウォーロックが突然話に入り込んでくると

「ムーの生き残りは他にもいたってのか!？」

「ああ・・・・いた」

しかしムーの末裔は決して表舞台に出る事はない

ムーの末裔のやれることはもしもムー大陸が

復活した時ムー大陸に帰るためムーの人間らしくなること

俺もそれだけを生きがいとしてきた・・・・・・・・しかし

ムーの生き残りが暮らす村・・・・

ムービレッジ

そこにはムーの生き残りが暮らせるよう

人間が入れないよう電波障壁が張られ

サテラポリスに気づかれる事も無い・・・・・・・・

そして俺達はムー大陸にいつか帰れるよう

いろいろな情報を探した・・・・・・・・

しかし！

奴らが現れた

「奴ら？」

スバルは思わず聞いてしまう

（スバル・・・敵だっけと忘れてねえーよな）

奴らは電波障壁を難なく破り

俺らに襲い掛かってきた

奴らの強さは半端じゃなく

俺の家族も友もどんどん殺されていった

そして生き残ったのは俺とソロだけだ

「・・・・・・・・」

そして俺は逃げた・・・奴らから

食料も水もなくともムーの生き残りとして

ムーに帰る義務があるだから死ぬわけにはいかなかった

そんな時出会ったのが

へ大丈夫？

ミソラだった・・・

それが俺とミソラの出会いだった

### 第三十一話 ミソラとタイソンの過去其の1（後書き）

また一週間ほど更新できないと思います  
すいません

あと分かりづらくてすいません

## 第三十二話 ミソラとタイソンの過去其の2（前書き）

前回同様

基本タイソン視点で話が進みます

回想シーンの間はタイソン以外のキャラは「」で話します

回想シーンのキャラは〽で話します

また―――――ってやったら回想終了

です

### 第三十二話 ミソラとタイソンの過去其の2

奴らから逃げるうちに俺は

ベイサイドシティに辿り着いた

そこで俺はミソラに出会った

「大丈夫？ボロボロだけど」

動く体力の無かった一タイソン（俺）はそのまま  
気絶した・・・そして目が覚めると

そこはボロボロだが

何かが溢れている場所だった

「あつ目が覚めた！」

おかあさんこの子目が覚めたー」

その幼く優しい声はなにか俺の心に響いた

「誰だ？お前」

「私？私は響ミソラ

大丈夫？たくさん怪我してるよ？」

「・・・」

「ミソラ、あんまり人の事聞いちゃ駄目よ！」

「はい」

台所から出てきたのは赤髪でその幼い声の主に似ている

「大丈夫かしら凄い怪我だったけど・・・」

あつ名前聞いてなかったわね」

「タイソン・・・」

「よろしくタイソン君」

「よろしくねー」

（なんで俺はこんな奴らに名前を・・・！）

その時何か嫌な予感がしたそしてその予感の数十分後当たることになる

「あつ私は響フミレ改めてよろしくねタイソン君」

なるな

$\{$   
 $\{$   
 $\{$   
 $\{$   
 $\{$   
 $\{$

俺に関わるな

ど、どうい、う事？

「ああなたのその傷こんな歳の子が負う傷じゃないわなにかあったのね・・・」

「話して信じるとは思えない……」

「おかあさん……なんで信じれないの？」

幼いこいつには分かるはずも無い・・・そう思っていたが  
 へ私信じるよ

幼いからこそその純粹さに俺は心を少し開いた  
そして何があつたのか自分がムー人であること  
すべて話した．．．それでも信じなければ．．．  
へそうなの大変だつたわね

!
   
 { }

「なんでおどろくの？」

$$\begin{array}{c} \text{---} \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \text{---} \end{array}$$
$$\begin{array}{c} \overbrace{\quad\quad} \\ \overbrace{\quad\quad} \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ ! \\ \underbrace{\quad\quad} \\ \underbrace{\quad\quad} \end{array}$$

タイソンは一ヶ月近く「奴ら」から逃げてきた人の温もりを一ヶ月ぶりに感じ

タイソンは涙を流していた

そしてタイソンから出てきた言葉は

「ありがとう」

だ  
っ  
た

## 第三十二話 ミソラとタイソンの過去其の2（後書き）

次回！ミソラとタイソンの過去のラストです

ただ予定通り書くとすげーめちゃくちゃになりそうです  
ならないよう努力します！

### 第三十三話 ミソラとタイソンの過去其の3（前書き）

前回同様

基本タイソン視点で話が進みます

回想シーンの間はタイソン以外のキャラは「」で話します

回想シーンのキャラは〽で話します

また―――――ってやったら回想終了  
です

あとちょっと風邪気味ですので誤字や無理矢理な表現があるかもしれません

ないよう努力します

### 第三十三話 ミソラとタイソンの過去其の3

それから俺はベイサイドシティのミソラの家に匿ってもらった  
普通に家事を手伝ったりしていた

家族のように接してくれる二人に俺は完全に心を開いていた

「……………」

「ミソラちゃん……………」

その話の間黙っていたハープ・ノートをロックマンは心配していた

そして三人で買い物に出かけた時の事だ

「タイソン君ですね？」

「……！」

タイソンは驚くのも無理は無い

以前書いたようにムー人のことは誰も知らない  
しかし名前まで知っている……………」

その時俺の…………ムー人の血が騒ぎ

「うわああ……………」

俺は初めての電波変換をする

「……………」

幼いミソラは何が起きたか分からなかった

「な、なんなの、タイソン君、その姿！」

当然フミレも驚く

「それが電波変換ですよ」

その謎の男はどこまで俺のことを知っているかは

わからない……………」

これ以上ミソラやフミレさんの迷惑をかけるわけにはいかない

そう思い

ミソラ達に別れを告げて去る……

そうしようとした時……

男の放った謎の光線が

フミレさんに当たってしまった

「おかあさん!？」

「ふはははははは」

「貴様!!」

ドクン

再びムー人の血が騒ぎ

気づいた時には男は気絶する直前まで追い詰めていた

俺に相当な傷があった……今思えばかなりの強敵だった

「ふははははははは」

やはり貴様は……

化け物だ!!

「……!!」

（そうだ……俺はムー人……

化け物かもしれな……）

「タイソン君は化け物じゃない!!」

「ミソラ……」

「タイソン君」

「いままでありがとな」

「えっ」

直後俺は男をウェーブロードまで連れて行き  
ベイサイドシティを去った

- - - - -  
「そんなことが・・・」

ミソラちゃんなんて言ってくれなかったの？」

「怖かったの」

話してもみんなタイソン君を倒そうとするって  
思っちゃって・・・だから・・・」

「ミソラちゃん・・・僕・・・」

「わかってる・・・」

スバル君なら信じてくれるって・・・でも！」

「さて・・・話はここまでだ」

俺は・・・俺らは自分達の目的のため

ミソラ、お前を倒す！」

（・・・そうだ

私はタイソン君を止めるためここに来たんだ  
だから！）

「ふっ・・・ようやく戦う奴の顔になったな  
行くぞミソラ、お前をたおす！」

第三十三話 ミソラとタイソンの過去其の3（後書き）

最後会話文だらけっすね

ただ風邪気味ですので勘弁してください

### 第三十四話 激闘（前書き）

同時期に始めたレッドスター先生の作品はもう50話近く……

頑張んなきゃ！

あ、あと風邪治りました

治りましたが、ど安静にしたいので短いです

### 第三十四話 激闘

「サンダースラッシュ！」

「シヨックノート！」

ベルセルク・タイソンの放った電気の衝撃波と  
ハープ・ノートの放った音符型の弾丸がぶつかり  
相殺される

「バトルカード！ ブレイクサーベル！  
そして重力変換！！」

ハープ・ノートの右腕がサーベルに変わり  
さらにハープ・ノートへの重力が弱まり  
スピードが上がる

「捉えた！」

しかしハープ・ノートの攻撃は  
ベルセルク・タイソンにあっさりかわされてしまいそして

ズバッ

後ろから斬り付けられてしまう

「きゃあ！」

「ミソラちゃん！！」

「油断してんじゃねーよ！」

サンドイッチスラッシュ！」

ハープ・ノートが斬られ油断したロックマンは  
キール・ドラゴにサンドイッチの如く両腕の爪に  
はさまれてしまう

「うわあああーーーーー」

「スバル君！」

倒れながらもロックマンを心配するハープ・ノートに

ベルセルク・タイソンは

「甘い」

上空から剣を振り下ろしながら

「サンダーボルト！ブレイド」

ズバッ ドゴオoooooooooooo

ベルセルク・タイソンが斬りつけたところに  
雷の柱が立つ

「フンッこの程度かミソラ……！」

サンダーボルトブレイドで強烈なダメージを負った筈の  
ハープ・ノートが立っていた……それもほぼ無傷で  
「それがヒールノイズの……」

「ノイズ変換って所かな」

「面白い

ノイズフォースビッグバン  
出してみる！NFBを！」

### 第三十五話 届け！NFB

「面白い

ノイズフォースビッグバン

出してみる！NFBを！」

『まだよ！ミソラ！』

「えっ！？」

ノイズフォースビッグバン

『いい？私達のNFBは

ノイズ率の高さ・・・正確には

ノイズに変換したダメージの強さだけ威力が上がるの』

「うん、つまり」

「俺を倒すには足りないというところか？

にしても敵に手の内を明かすとは

まだまだお前も甘いな」

「そうかもね

・・・

ハープ・・・」

『なに？』

ボソボソ

『・・・わかったわ』

「フンッどんな作戦を考えようが俺には通じん

サンダースラッシュ！！」

雷の衝撃波がハープ・ノートに迫る

ハープ・ノートはそれをかわさなかった

バチィ

「・・・・・・・・・・ノイズ変換・・・」

その言葉と共にハープ・ノートの傷が消え  
周囲のノイズ率を上げる

『ノイズ率125%・・・』

「ところで・・・  
いつだ？限界は？」

「『!?!?』」

そうハープ・ノートはいくらダメージを受けようと無駄  
つまり無敵・・・

そう思う人も少なくないだろう  
しかし確実にダメージをノイズに変換する力は衰え  
さらにハープ・ノートが耐え切れないほどのノイズがでたら？

ハープ・ノートは電波変換は解ける  
つまり

ミソラの敗北である  
それをタイソンは知っていた・・・いや察していた  
「ようするに現界を超えるダメージを与えればいいわけだ」

ダッ スバツ

流れるようにタイソンは走りハープ・ノートを斬った  
「ぐう!・・・ノイズ変換」

『なんて威力なの！ただの攻撃でもう  
150%まで・・・でも!』

「うん私の限界・・・150%・・・」

「・・・・ふっ・・・来い」

「いくよ！ハープ！！」

ノイズフォースビッグバン  
「『NFB！』」

ヒール・ホワイト・ホール！！！！」

ハープ・ノート周辺のノイズが消えハープ・ノートに頭上に  
白い塊となって現れる

「『いつけえーーーーー』」

ズズズズズ

でかい塊の割には早くタイソンに近づいてゆく

これは重力変換をヒール・ホワイト・ホールに使っているおかげだ

「来い！」

ドゴオーーーーー

「！……ミソラちゃん！」

強い衝撃は離れて戦っているロックマン達にも伝わっている

「うおっすげえ威力……ル……委員長大丈夫か？」

キール・ドラゴは委員長に衝撃波が届かないよう守っている

（なんでこんな委員長を守ってくれる健太君が敵なんだろ……）

）

「はあ、はあ」

『や、やったわミソラ……！』

ズバアアアアアア　ズバッ

突如ベルセルク・タイソンのいた場所から

衝撃波が床を切り裂きながら飛んできそれをハープ・ノートは食ら

つてしまう

「きゃああああ」

「まさか出す事になるとはな」

そこに立っていたのはトライブキングのような姿をしたタイソンだった

「これがタイソン・ザ・ムーだ」

これがタイソンの最終変身だった……

「本当の戦いはこれからだ」

**第三十五話 届け！NFB（後書き）**

感想待ってます・・・

### 第三十六話 タイソン・ザ・ムー（前書き）

残酷描写アリに一応しました必要ないと思う人は言うてくださ  
い  
前回書いた事が書いてありますが念のためです  
あと前回長くてアレですが今回短いです

### 第三十六話 タイソン・ザ・ムー

「！……………本気を出しましたか……………タイソン……………」

「いくぞ終わらせようぜミソラ……………」

ドゴッ

「！ガハッ」

『ミソラ！？』

今起こったのは超高速でタイソン・ザ・ムーがハーブ・ノートに迫り膝蹴りを入れたのだ

「ノ、ノイズ変換……………！」

ハーブ・ノートが驚いた理由は簡単だ

ノイズ変換されなかったのだ

「な、なんで！？」

「気づかないのか」

「な、なにを！？」

敵であるタイソンに聞くほどミソラは動揺していた

「簡単だ、ノイズ変換できなかったのは

ダメージのせいではなく

おまえ自身の消耗だ」

「！！？」

必然の結果だろう

何回も能力を使えばその力は衰えていく

同時にハープ・ノート自身にも疲労がたまる  
つまりタイソンの強力な攻撃をノイズに変換し続けてきたせいで  
かなりの消耗があるという事である

「そんな！」

「終わりだ！」

ムーグランジャー！」

「……………！」

ズオオオオオオーーーーー

突如ハープ・ノートの足元から火柱が現れ

シュツシュツ　グサツ　グサツ

手裏剣が飛んできてそして

「くられっ！」

タイソン・ザ・ムーに斬られた

「きゃあああああああ」

ドサツ

「……………くっ

や……………はり……………この変身は……………きついな」

タイソンの最強変身である「タイソン・ザ・ムー」は

強いがそれだけ体力を消耗する変身なのである

「さて……………はじめ……………るか……………」

フラつきながら

タイソン・ザ・ムーはハーブ・ノートの元へゆっくり歩く

「ロックマンは

星月がひきつけ……てくれ……てるか……

……!!!!」

その時ハーブ・ノートを大量のノイズが包む

「こゝこれは!？」

第三十六話 タイソン・ザ・ムー（後書き）

次回は明日か明後日だと思います

### 第三十七話 ヒールとの対話

ブワアアアアアアアアアア

突如ハープ・ノートを包んだ巨大なノイズはどんどんでかくなっている

「な、なんなんだこれは!？」

「うああああああああああ」

「こ、ここはどこ!？」

気づいた時にはハープ・ノート……いやミソラは真っ白な空間にいた

「タイソン君は!？スバル君は!？ハープ!？」

『落ち着きなさい』

いきなり黒髪の女性に話しかけられミソラは驚く

「!？」

だ、誰？」

『私は……そうですね……』

ヒールPGMのヒールって所ですね』

「ヒールPGM!？」

『はい今あなたは……』

「じゃああなたがいつもノイズ変換とかで助けてくれたってこと？」

『まあそうですね』

ノイズ変換はハープ・ノートの能力ではない

ヒールPGMの力を借りたヒールノイズ状態のハープ・ノートの力だ  
『ところで今ミソラさん、あなたは瀕死の重傷です』

「瀕死！」

『はいそして今私が』

ノイズ変換を勝手にこなっております』

「そ、そうなの？」

『はい』

こんな時で見知らぬ場所で話していて混乱しているミソラに超冷静で一回も笑わないヒールは容赦なく話を続ける

『そして傷は癒えてきてますが……』

「？」

『その反動で出たノイズが大きすぎるのです』

そのせいでここに来てしまったのです』

「来てしまった？」

『はいここはクロウがあなたが意識を深く失ったり』

ノイズに耐え切れず気絶した時や重傷を負い気絶した時に来るようになってます』

「クロウ君が……」

『まったく引込み思案な私に突然来たら話せつてまったくブツブツ』

「あの〜」

『はい？』

「いつもありがとう」

『……なぜ突然』

「あなたがいなかったら私はここにいない……」

『そうですか……では私からも言わせてもらいます』

「うん」

『いつもありがとうございます』

「えっ」

その言葉を言った時はヒールは微笑んでいた

『あなたと・・・あなたの仲間達といつも一緒にいれてあなた達の笑顔を見れて』

私は幸せでした・・・だから死なないでください』

同じ言葉でもヒールにとって言葉の意味の重さはでかいのかもしれない

「うんわかった

あつそうだあなた外に出られないの？」

『クロウに頼めば・・・』

「じゃあ今度私のライブ来てよ

1人だけ仲間はすれなんてできないよ」

『・・・・・・』

「ヒール？」

『おかしいですねプログラムは涙は出ないはずなのに』

「おかしくなんか無いよ」

『えっ』

「あなたはプログラムとかじゃない私の友達だもの」

『・・・・・・』

もう一回言わせて・・・』

「うん私からも」

「『ありがとう』」

『最後に2つ言いたいことがあります・・・』

「何？」

『私の力を貸す事であなたは最後の変身します』

「最後の変身・・・」

『はい、その力は強大ですから・・・  
彼を殺さないで下さい』

彼とはタイソンのことだろう

「わかってる」

『もう1つは・・・』

「うん・・・」

『一緒に帰りましょう』

「うんもちろん」

そして友達を見送るように

ヒールはミソラに手を振る、笑顔で・・・

「これはまさか」

ファイナライズ!!!

カット

目映い光が消えると

そこにはブラック・エースに近い姿をした

ハープ・ノートが立っていた

「終わらせようよタイソン君」

「面白い・・・」

ダッ ドツッ

そして再び拳を交えた

### 第三十七話 ヒールとの対話（後書き）

今回かなり長くなりました

**第三十八話 最後の激突（前書き）**

よく見るサブタイトルですね・・・

### 第三十八話 最後の激突

「な、なんなんだ!？」

ファイナライズしたハープ・ノートと

タイソン・ザ・ムーの激突の衝撃はスバル達にも届いていた

「ちっなんてパワーだ……」

その衝撃に耐えられないのはキール・ドラゴも同じのようだ

『スバル! 今だ!』

「えっ……うん!」

「ノイズチェンジ!!」

「ハアハア」

「くっ」

ハープ・ノートのファイナライズもタイソン・ザ・ムーも

強力な力を得るかわりに消耗が激しい

そのため二人が激突するのは数秒に一回……

一秒に何回も激突すれば消耗が激しくあつという間に変身が解けてしまっだろう

それを二人は本能的に察し今の戦いに至っている

すると突然ミソラのハンターから

『ミソラさん!』

「えっ? あれ? ハープ?」

『私じゃないわよ?』

『ミソラさん!』

「あつもしかして……」

「ヒール!？」

『はい』

『あなたがヒール……』

この短い間にハープはヒールのことを知っていた  
恐らくミソラが教えたのだろう

しかしそんな事をしてる時間は無い

どうやって教えたかは後に説明するでしょう

『ミソラさん……大丈夫ですか？』

「うん大丈夫

というかあなたとはあの空間行かないと話せないじゃないの？」

『クロウに頼みいつでも話せるようにしてもらいました』

『早いわねあのお調子者……』

『確かにお調子者ですね……』

「ハハハ……」

お調子者といわれてるが特殊な空間でしか会えない存在を  
数分で通信できるようにしたのだから

クロウの技術の高さが分かるがその辺は触れないでおう  
するとミソラが異変に気づく

『どうしたの？ミソラ？』

「いやおかしくない？」

タイソン君が攻撃してこない」

『確かに』

「ぜえぜえくそっ！」

タイソンはとつくに限界が来ていた

攻撃してこないのはわずかな休みといったところだろう

その補足としてヒールが話す

『当然といえば当然ね

ミソラさんより実戦経験が多いといっても

あの状態にはこちらよりも早くなっている

限界が来ても当然ね……

ノイスフォースビックバン

ミソラさん！NFBです！」

「うんわかってる……でも」

「？」

「タイソン君を傷つけないか心配で」

ノイスフォースビックバン

「大丈夫ですこのNFBは

人を傷つける技じゃない……」

その言葉を聞き安心したようにミソラは笑う

「そっか」

「ちなみに名前は……です」

「わかった」

「いつまでごちゃごちゃ話してる……」

「！タイソン君……」

「終わらせるぞ……」

これが俺の最強技……」

「なら私も出し惜しみはできないね」

「カイザーデルタブレイカー……！！」

ノイスフォースビックバン

「NFB！」

## 第三十八話 最後の激突（後書き）

次回ミソラ対タイソン決着です

番外編其の？ モデル（前書き）

またどうでもいいことをグダグダやります・・・  
見たくない人は飛ばしてください

## 番外編 其の？ モデル

作者「さあさあ今日はキャラのモデルを語り合っぜ〜」

レッドスター先生「ちなみにゲストは俺！レッドスターだ！ところで牛先輩君……なぜ俺の登場回数が少ないんだ？」

作者「か、勘弁してください」

俺だって頑張ってるんすよ、もう少しで出るんで

「我慢してください」

ミソラ「あのこれはなんの集まりですか？」

スバル「確かに」

クロウ「ZZZZZZ」

「寝てる!？」

クロウ「ん？あれ？どしたの皆？」

バキッ

クロウは殴られた

それも四人同時に四人のスピードがあまりに同時のため音も同時なのだ

レッドスター先生「ナレーションご苦労」

クロウ「皆酷いじゃないか」

「てか何気にスバルやミソラちゃんも殴ったよね？」

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

作者「さて！そろそろ本題に入ろうか」

本題タイトル「キャラとか話のモデルって何？」

レッドスター先生「誰だコレ言ったの……」

作者「いえ今考えた台詞です」

クロウ「で？本題は？」

作者「いや今言ったじゃん！」

ミソラ「作者さんもモデルとか考えてたんですね」

スバル「ミソラちゃん何気に作者バカにしてる……」

作者「……聞かなかったことにしよう……」

クロウ「じゃまず俺のモデル……」

誰か「この駄目作者殴って」

すっごいへこんでてこっちのテンションが下がる……」

スバル「えっいいの？そんなことして……」

レッドスター先生「俺が許可する

ついでに電波変換しろ」

「えっ……」

レッドスター先生「さっ早くやれ3、2、1」

ドッカー—————ン

「ギャアアアアアアアアア」

ロックマン「生きてるかな？」

ハープ・ノート「作者だし……」

ボロツ

作者「さ、さて本題へ……

まずクロウ……自分でやって」

クロウ「はいはい俺ね俺は

別の小説の流星のロックマン ○日への

ツバサがモデルです」

スバル「いいのかな他の小説の名前出して……」

レッドスター先生「大丈夫名前伏せてるから」

作者「ちなみにツバサの容姿、技術力をモデルにしています  
性格は同作品のゲイルの変態なしと思ってください

（そのうちゲイルっぽくしていくが・・・）

「・・・復活はやっ！！」

作者「作者をなめるな！」

クロウ「てかゲイルっぽくするってどゆこと？」

作者「ちっちゃいことは気にすんな」

さて次は・・・

ミソラ「どうしたの？」

レッドスター先生「わかったキャラのモデルとかとくにないんだろ  
！」

作者「ギクツ」

クロウ「へえ」（また1つ作者の弱みを握った気がする）

作者「い、いるよ！・・・あと1人だけ・・・」

「・・・」

スバル「そ、それって誰ですか？」

クロウ「スバル・・・ナイス」

レッドスター先生「うむほめて使わそう」

スバル「何キャラ？」

作者「なんだ？俺の作った沈黙に耐えられなかったのか？」

スバル「は、はい」

作者「あ、そう・・・」

ミソラ「で、誰ですか？」

作者「ヒール・・・」

クロウ「姿だけね」

作者「なんで知ってんだよ！？」

クロウ「だってヒールを作ったのは俺だよ」

作者「そっか・・・」

スバル「誰？ヒールって」

カクカクジカジカ

スバル「へえ」

レッドスター先生「ちなみに番外編と本編じゃ空間軸が違うから本編で会うまで知らない事になってるぞ！」

クロウ「ねえ早く話して終わりにしない？」

「『『そうだね』『』」

作者「おめーらどんだけめんどくさくなってるんだ!？」

クロウ「じゃ言っちゃおう」

作者「姿のモデルは週刊少年○ヤンプのめ○かボックスの

赤 青黄ですあの「堪忍してください」のところかたまらなく面白かったんで……」

クロウ「隠れSだね……」

作者「内面のモデルはしいて言うならアイリスだね  
ってあれ!？皆?どこ行っただの?」

皆帰ったので終わりです………(泣)

番外編其の？ モデル（後書き）

皆ひどいじゃないか！！！！

レッドスター先生「まあまあ最初は駄目作者とか言われる予定だったんだろ？」

それよりはマシじゃね？」

まあそうですが・・・・・・てかまだいたの！？レッドスター先生！？  
レッドスター先生「それじゃあ皆さんアディオス！」

・・・・・・はあ・・・・・・

あつ自分の中でのキャラの姿の想像図を考えたら送ってください・・

・・

はあ・・・・・・

### 第三十九話 決着！（前書き）

またよく見るサブタイトル・・・  
久々の二話更新です・・・  
あと途中タイソン視点になります

### 第三十九話 決着！

「カイザーデルタブレイカー！！！！」

ノイズフォースビックバン

「NFB！」

「オオオオオオオオオオオオオオオ」

「ハアアアアーーーーー」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

タイソン・ザ・ムーの放った三角形の衝撃波と

ハープ・ノートが放った巨大な衝撃波がぶつかり合う

「見事だミソラここまでやるとは……だが！

俺はそれを超える！！！！」

「くうう」

カイザーデルタブレイカーの威力が上がり

ハープ・ノートは耐えられず後ずさる

ここまで来ると恐らく

お互いの強さは関係ないだろう

ここで重要になるのが

「意地」であろう

自分の計画のためミソラを倒す

助けるためタイソンを倒す

そんな意地のぶつかり合いなのだ

「ま、負けないよ！」

ズオオーーーーー

ハーブ・ノートのノイズフォースビックバンのNFBの威力も上がる

「絶対に……」

負けられないんだぁー！

そうハーブ・ノートが叫ぶと

ノイズフォースビックバンさらにNFBの威力が上がった

「くっ、くそっ！」

徐々にカイザーデルタブレイカーが押されていく  
そして

完全にカイザーデルタブレイカーが飲み込まれ  
タイソン・ザ・ムーに向かって突き進む

(くっ……だが避ければ……)

『無駄ですよ……』

「なっ！は、早い！」

『私が勝手に重力変換しました』

「ありがとう！ヒール」

「くっそおー！ー！ー！ー」

ノイズフォースビックバンそしてNFBがタイソン・ザ・ムーを飲み込む

「……………！こ、これは」

ノイズフォースビックバンそのNFBは俺にダメージを与えてはいなかった  
ただのやさしい光だ……ミソラのような……

「そうこれはタイソン君の攻撃を消す技……」  
ノイズフォースビックバンそしてここからが本当のNFBだよ」

ダッ

そしてハーブ・ノートはジャンプしタイソン・ザ・ムーに迫る  
「……………」

死を覚悟したタイソンにとってハーブ・ノートのとつた行動は衝撃的だろう

グッ

手を握っていた

平たく言えば「握手だ」

「・・・・・・・・・・」

タイソン・ザ・ムーは啞然としていた

ノイズフオーズビッグバン

タイソン・ザ・ムーは本能的にNFBの正体を察している

いや本能的に察してるからこそ啞然としていた

啞然とするのもわかるだろう

なぜならその技の正体は

和解する力なのだから

太陽のように相手を包み込み

ノイズフオーズビッグバン

相手と和解するそれがNFB・・・・・・・・

ともあくしゅ

「友握手だよ」

「フッ・・・・・・・・ハハハ」

タイソンは笑っていた数年ぶりに・・・・

「和解する力か・・・・お前らしいな・・・・」

「負け・・・・認めてくれるよね」

「わかったよお前には敵わないな今も昔も・・・・」

「フフッ」

『一件落着ですね』

『そうね』

少しの間そこには笑いが溢れていた  
そして

「話してくれるよね・・・目的を」

「ああ」

### 第三十九話 決着！（後書き）

いや一日2回更新は疲れるわ

明日はちよつと用事あつて時間がないので描けません

## 第四十話 フィーリングスの目的（前書き）

更新遅れてスイマセン

活動報告にも書きましたがマウスの調子がおかしく

それもあった更新遅れたり

短かったりすると思います

## 第四十話　フィーリングスの目的

「・・・・・・・・！」

「？」

キール・ドラゴは早くもタイソンがやられたことに気づいた  
ロククマンはそれにまだ気づいていないから頭に？マークを浮かべている

「タイソン君・・・・・・・・」

「わかつてる」

ミソラの言葉にすぐ言葉を返しタイソンは話を続ける

ちなみに二人共電波変換を解除して話している

「いいかまずお前らに説明する事がある」

「説明？」

「・・・・・・・・」

『どうしたのよヒール』

『・・・・・・・・いえ・・・・・・・・』

どうやらヒールは気づいているようだ

いや知っていたに近いかもしれない

するとタイソンから重い言葉が告げられる

「俺達の肉体は消えかかっている・・・・・・・・」

「『!!!?』」

『・・・・・・・・』

「ハンターの中に入ってるお前は気づいていただろうな」  
十中八九ヒールの事だろう

『・・・・・・・・ええ気づいてました』

「そうか・・・なら説明してやってくれ」

ヒールが『はい』と返しているときミソラから

「どうということ」と聞かれる

『本当は言いたくないのですが・・・・・・・・』

ヒールは優しい・・・だから言うのが苦しいのだろう

『彼の肉体は約一年ほど前から

消滅の道をたどっています』

「ッ！そんな!!」

『どうということよ!?!』

『そ、それは私も・・・』

「ハープ」

『あつ、ごめんなさい』

『いえ』

「フィーリングスの連中は年数はともかく  
全員体が消滅しかかっている

そんな俺達を集めたのは他でもない

EXEだ」

EXEとはロックマンEXEエグゼのことだろう

『EXE・・・・・・・・』

（いったい何があるのロックマンEXEには・・・・）

ミソラがそう思っている間に

タイソンは話を続ける

「そして俺達を救う方法があるとEXEは言っていた  
それは……………」

「それはなに？」

(……………)

どうやらヒールは救う方法も理解しているようだ

「もつとも信頼するものに魂を預けると……………」

「魂ってどういう……………」

『簡単に言えば自身をデータ化しもつとも信頼するものの  
ハンターもしくは持っているプログラムと同化すれば  
助かる……………という訳』

「ミソラ……………もつとも信頼するもの……………  
俺とってそれはお前だ」

「……………」

ミソラは話の大変さに驚いていた  
するとタイソンの体が  
崩壊を始めた

ブウウウウウン

「ぐっ！」

「タイソン君！」

『ミソラさん！タイソンさん！早くデータ化を！！』

「……………うん！」

「……………！」

「？」

「タイソンとはこれでお別れか．．．．じゃあな」  
「どういうこと．．．健太君．．．」

そしてタイソンは消え去った．．．  
ミソラのハンターの中へ

#### 第四十話　フィーリングスの目的（後書き）

またちょっと暗くなり気味ですね

ちなみにもう少して過去の章は終わりです

クロウ「うわーーーーーおっきなネタバレ」  
うるさいわ

あと新作を書こうと思ってるのですが……

クロウ「読者様に聞いてどうするの？」

いや何を題材にするか今考えて今一番の候補は

め〇かボックスなんだ・設定だけけど

クロウ「ふーんあつそう」

## 第四十一話 レッドスター先生&クロウ再び（前書き）

新作どうしよう・・・

今回結構ギャグ多めです

ギャグって書くのムズイけど書いてると楽しいですね  
タイトルミスりました

## 第四十一話 レッドスター先生&クロウ再び

「さてスバル．．．こつちも決着をつけるか」

「．．．．．そうだね．．．．．」

直後キール・ドラゴとイヴァルヴノイズになったロックマンが激突・

．．．．

する直前に

ドッゴオーーーーーー

突如壁が壊れブルース・クロウとレッド・エージェント（先生）が入ってきた

「やつほゝスバル」

いつもの軽いノリでブルース・クロウが話しかけてくる

「．．．．．しまったぁーーーーー」

「ん？レッドスター先生「しまったぁーーーーー」でしょ？」

ようするにレッド・エージェント（先生）が

「しまったぁーーーーー」を「しまったぁーーーーー」

と言ってブルース・クロウが言い直したのだ

「おいおい出ていきなりキャラ出しすぎだろ」

キール・ドラゴはボソツとツツコム

「それでどうしたんですか！？レッドスター先生」

「明日のイナ○マイレブン録画してない気がする．．．．．」

「『『『えっ』』』」

その場にいたブルース・クロウとレッド・エージェント（先生）以外の

無論キールとキール・ドラゴも驚く



するとキール・ドラゴの後の委員長（の記憶を入れた器）が吸い込まれていく

「なっ！！」

「驚いた？この技・・・真空斬は

決めた重さのデータを吸い込む事ができる」

そのままブルース・クロウはこう続ける

「そこにいる白金ルナの記憶のデータを吸い込ませてもらうよ」

「貴様ぁーーーーーーー」

止めようとした時はもう遅く委員長の記憶のデータは吸い込まれ小さい球体となつて

ブルース・クロウの右手に置かれる

「そんじゃ！」

するとクロウはスバルと遠くにいるミソラに

「帰るよ~~~~二人とも~~~~」

「まっ、待て！！」

「オーバーチャージ

ロックバスター！！！」

ブルース・クロウを追おうとしたキール・ドラゴに

強化されたロックバスターが当たり

そのダメージで動けなかった

「バ~~~~イ？」

そして三人はフィーリングロードの奥に消え去った

#### 第四十一話 レッドスター先生&クロウ再び（後書き）

レッドスター先生ってイナ○マイレブン見てるのかな？  
見てたらしいのに・・・

っていうかこの時代にイナ○マイレブンあんのか？  
にしてもなんか話があっさりしてるような

## 第四十二話 帰り（前書き）

何気に今回サブタイトル苦戦しました

## 第四十二話 帰り

フリーリングスのアジトをロックマン達が後にした時と

同時刻

「・・・・・・・・・タイソンはやられ、健太は逃げられましたか・・・・・・・・・」

『ごめんEXE、僕も止められなかった・・・・・・・・』

そうEXEとホープの会話が聞こえてくる

ちなみにホープとは昔ゴン太と何かあった・・・・・・・・・と思われる何かだ

しかし姿も能力も全てがEXE以上に謎だ

「仕方ありません・・・・・・・・・次は・・・・・・・・・」

その「次は」の言葉から先はEXEの表情は恐ろしいものだったがホープには見えていない

「次は逃しません・・・・・・・・」

『そうだね・・・・・・・・』

「だっつしゅっせ〜こっ〜」

「『』なぜ棒読み?」

「何で君たちよく息ぴったしになるの?」

その返答は早く来た

「「さあ」」

『知らん』

『わからないわ』

『というか早く帰りましょう』

ちなみに上から

ロックマン&ハープ・ノート、ウォーロック、ハープ、ヒールの順だ

「ヒール君は何でそんな俺にだけ強気なの?」

『うるさいです』

「何アレか？ちよい昔に流行ったツンデレって奴？」

『違います』

それにツンデレとは好きな相手に好きだとバレたくないからあえて強気な態度をとることです

私はあなたの事は嫌いです』

「詳しいな、おい」

『ようするに……』

ウォーロックはチラッとロックマンを見る

「……」

あいかわらず鈍感の極みであつた二人だつた

『ていうかさつきから聞こえてくる声なんだ？』

「うんミソラちゃんのハンターから聞こえてくるよね」

「ああ！ヒールの事？」

『まあようするに……友達ね』

「てかスバル前に番外編で説明したじゃ〜ん」

「『『番外編？』』」

番外編にも書いたが

番外編と本編では空間軸がちがうため

知らない事になってます

「おっ！WAXAワクサが見えてきたぞ！」

なんか説明がめんどくなつたクロウは

WAXAワクサが見えてきたことを使つて

話を逸らした

「本当だ」

「なんか久し振りの気がする〜」

『そうね』

「15、6話ぶり〜」

上からロックマン、ハープ・ノート、ハープ、ブルース・クロウだ

ズシャ

その言葉に対してのツツコミとして

ビーストスイングが放たれ

ブルース・クロウは気絶しかかっている

だが全員そんなクロウを無視しWAXAワクサに向かう

「無視かよ」

## 第四十二話 帰り（後書き）

次回はそれぞれの日常になります

まあようするにほのぼの編ですね・・・

でもタイトルが「失われし大切な絆」だしなあゝ

#### 第四十三話 会議（前書き）

更新遅れまくってすいません！！！！

えーとあらすじは

フリーリングスとロックマン達の戦いはブルース・クロウの力で幕を閉じロックマン達はWAXAに帰ってきたって感じです  
サブタイトル変更しました

実はレッドスター先生の作品に僕の考えたキャラが出てきました  
レッドスター先生！クロウみたいな面白いキャラにしてください！！！！

あとネタが少なく短めです

## 第四十三話 会議

ファイリングスとの戦いから数日後  
ワクサ  
WAXA会議室では

「え〜とまずは〜え〜と〜」

このぐだぐだの話し方をしているのはクロウだ

何故今会議をしているかは簡単だ

「ファイリングスとの戦いについて・・・ですよね、暁さん」  
スバルの確認に暁は

「ああまあそうなんだが・・・」

暁はクロウのやる気のなさに自分のテンションまで下がってしまったのだ

「ではクロウちゃん・・・まずおおまかな戦いの様子について教えて頂戴」

ヨイリー博士がクロウに声をかけると

「はい！」

「・・・・・・」

「なんだよこの沈黙〜」

なぜ沈黙するかも簡単だろうなぜかクロウはヨイリー博士の言う事は素直に聞いたのだ

「まあナレーションで説明しても俺が自分で説明するもありだけど〜とりあえず！この話は置いとく！」

「・・・・・・」

ちなみに言っておくが上の五人はスバル、暁、長官、ミソラ、委員長、キザマロだ

ちなみにゴン太もいる

なぜ委員長トリオがいるかというと

## 回想シーン

「えーとルナちゃん、キツザマーロ、ゴン太郎だっけ……」  
このふざけた事を言っているのはもちろんクロウだ

「違います！」

「ゴン太郎？」

「なぜ私だけあつてるのかしら……」

上からキザマロ、ゴン太、委員長だ

「ていうか、なんですか！？キツザマーロって何人ですか！？」

「フラシアとか？」

「普通に返さないで下さい！」

「ゴン太郎？」

そしてこのあと何度もクロウがボケるので少し飛ばそう

「まあようするに会議で君達の状態について話すからついてきてつてこと」

「はあ」

「ゴン太郎？」

「ゴン太……もういいから」

ちなみに委員長達は未だ記憶を抜かれたままだ

だからクロウが早急に記憶を入れる器を作ったのだ

その器は基本ウィザードのようなもので案外三人はその状態を……

・特にキザマロは楽しんでいる

## 回想シーン終わり

「一体なんなのあのクロウって人」

「牛井WAXAにあるかなあ」

「すぐふざけますが話が合いそうです」

「では教えてもらえるかしら今回の戦いを……………」

「はい！」

クロウは強く返事をした

#### 第四十三話 会議（後書き）

にしてもロックマン対キール・ドラゴは決着つけるつもりだったんですが……

なんかぐだぐだになりそうでやめたんですね……

ていうか回想シーンに入るときのやり方最初からこうすればよかったんだな

ちなみにフラシアの元はフランスとロシアです

番外編其の？ 早すぎた番外編そして本物のあの先生 (前書き)

今回の番外編はレッドスター先生と一緒に考えて相談しながら書きました。よって今回出てくるレッドスター先生たちは本物って感じです

あと番外編早すぎるとか言わないでください・・・

## 番外編其の？ 早すぎた番外編そして本物のあの先生

作者「ど～も牛先輩で～す」

スバル&ミソラ「テンション高・・・」

作者「ん？おお！にじファンの流星のロックマン大人気の理由の一つのスバミソじゃないか」

スバル&ミソラ「スバミソ？」

クロウ「うんうんにじファン使ってて流星のロックマン書いてる人で知らない人はいないよね」

作者「うんうん」

スバル「で？どうしたんですか？」

クロウ「自動販売機で当たりでも出たの？」

作者「・・・まあ確かにそれ喜ぶけど」

ミソラ「あれ？ハープとロック君とレッドスター先生いないの？」

作者「にやり」

レッドスター先生「あっ・・・ど～もーレッドスターです」

ドラグ「ドラグです！」

バード『バードだ』

スバル&ミソラ「いつからいたの！？」

作者「最初から」

クロウ「正確には十秒前ね」

スバル&ミソラ「今のやりとり十秒！？」

「・・・うん！」「」

スバル&ミソラ「・・・」

作者「にしてもまさかドラグとクロウがここにきていたとは」

ミソラ「ここ？ここって・・・」

スバル「・・・」

二人は分からないようだ

そのときレッドスター先生が！！！！

レッドスター先生「ナレーションごろう」

そしてその時ドラグが衝撃の発言を!!!!?

ドラグ「実は、もう一人のスバルさんを連れてきたんだ」

作者「え？聞いてないよ？」

クロウ「俺は知ってる」

レッドスター先生「えっ！？俺も聞いてないよ？」

作者「レッドスター先生も!？」

クロウ&ドラグ「それではどーぞー」

デレレレレレレレ

デン！

スバル2「あれ！？ここどこ!？」

ウォーロック2「うおっ・・・スバルが2人!？」

スバル「なんかどつかで会うような」

ミソラ「会ったことあるじゃなくて会う気がする?」

スバル「うん」

スバル2「(あれ？さっきミソラちゃんライブ行っただけじゃ・・・

・)」

ウォーロック2「スバルが2人・・・まさか・・・俺も・・・」

スバル&スバル2「まさか・・・」

.....

「「「「「「「「「「あれ?」」」」」」」」

レッドスター先生「・・・なんでいないの牛先輩?」

作者「知らないっす・・・にしてもこの小説の番外編でなぜ作者の予想以上のことが起きるんだ？」

ドラグ「さあ？たぶん牛先輩先生がいるからじゃない？」

作者「どういう意味！？」

クロウ「そういう意味じゃね」

作者「そっか！そういう意味・・・ってうおおおい！！！」

スバル2「あのくもう帰っていいですか？（ミソラちゃんのライブに遅刻するから）」

レッドスター先生「うん帰っていいよ（てか俺も行こう）」

クロウ「俺も」

ドラグ「ミソラちゃんって誰？」

作者「・・・・・・・・・・」チラッ

スバル「・・・・・・・・・・あの・・・僕も」

ミソラ「私も・・・・・・・・自分のライブ見てみたいし」

作者「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」  
「ついにしゃべなくなっちゃったあー」  
「・・・・・・・・」  
「」

そしてスバル2とレッドスター先生とウォーロック2とドラグとバードは自分の世界に帰りましたとさ

番外編其の？ 早すぎた番外編そして本物のあの先生 (後書き)

ちなみに俺もミソラのライブ行きました

クロウ「結構元気じゃん・・・」

あとスバルの言ったことはレッドスター先生の作品を読めばわかります

## 第四十四話 ゲットアビリティプログラム

クロウは先日の戦いのことを話す  
ただ自分の戦いは伏せて・・・

「って訳です」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

ヨイリー博士を除いて全員が沈黙する

「どつたの？皆？」

「そうよ？せっかくクロウちゃんが話してくれたのに」

先陣を切って暁がクロウに聞く

「何でお前ちよつと真面目なんだ？（少しふざけてるが）」

「おいおい暁、俺はいつつも真面目だよ？」

「（（（（（嘘つけ！）））））」

「まっこの話は置いといて」

「そうね・・・」

急に重い空気になる

「・・・・・・・・・・？」

ただゴン太は気づいていないが

「クロウ君例の話を本当にするのか？」

「もちろん長官・・・・・・・・分らないよりは分かるほうがいいし  
よ」

「・・・・・・・・・・うむ」

重い空気といつもふざけてるクロウの真剣な声から

大変な話だと大半が理解した

そして・・・・・・・・

「記憶を抜かれた三人を元の体に戻すのは不可能・・・・・・・・・・だ」

「「「「「!!!?」「」「」「」

「ど、どういことだよ!?!」

「そ、そうです!なんで……………」

「仕方ないのよ」

「なぜなのか教えてください!」

上からゴン太、キザマロ、ヨイリー、委員長の順だ

「……………フォルテって知ってるか?」

「フォルテって……………確か……………」

「スバル君知ってるの?」

「うん教科書に載ってたよ……………確か

ゲットアビリティプログラムってデータを持ってるって……………」

ゲットアビリティプログラムとは2000年まえにいたフォルテという  
電腦の破壊神と呼ばれた

完全自立型ネットナビが持っていたプログラムである

「そのプログラムは壊れたナビなどの残骸データを取り組むプログラム  
」

「????よくわかんねー」

全然理解してないゴン太をクロウは無視して話を進める

「問題はなぜEXEがゲットアビリティプログラムを持ってるかは  
……………」

「前に言ってた戦闘データ……………」

「当たりだ……………」

「まあ本当に問題なのは・・・」

#### 第四十四話 ゲットアビリティプログラム（後書き）

はぁ・・・しんどい・・・

あっなんでこんな。クマン。っぽい引きなのは・・・理由が・・・

・

まあ特にないんですが・・・

スバルの言う戦闘データとは第八話に載っています

## 第四十五話 E X Eの力（前書き）

書き忘れましたがウィザードたちは会議室にいません

あとクインティアとジャックはまだ出れる状態ではないって感じですよ

（やべー書き忘れてた・・・・・・・・・・）

クロウ「ドンマイ」

・・・・・・・・・・イラッ・・・・・・・・・・

あと始めたばかりの「流星のロックマン 電波大戦……はじまる」を

やめさせていただきます・・・・・・・・・・

勝手な作者ですいません・・・・・・・・

## 第四十五話 E X E の力

「まあ本当に問題なのはE X Eがどれくらい戦闘データをいかせるかだ」

「どういつこと?」

「「戦闘データ?」」

ミソラと委員長トリオがよく分からず聞く

「ああそつか三人は知らないんだっけ……え」と

説明中……………

説明終わり

「????」

「難しいわね……」

「興味がわきます」

ゴン太は話が分からず、委員長も勉強はできるが馴染みのある話ではなくいまいちわからなかった

キザマロは話に深く興味がわいている

「まっ！てわけでミソラちゃんの質問移ろうか」

クロウのテンションが上がったのはゴン太が話を分かっていなくて面白がっている事と

……ぶっちゃけ委員長トリオよりミソラの方が好きだからである

ちなみにクロウがミソラファンクラブ会員になったのはファンクラブ創立時からである

ようするにめちゃくちゃミソラファンてことである……………

「え〜とね〜まあここ重要なんだけど……………」

「実は言ってる通りなのよ」

（俺のセリフなんだけどヨイリー博士……………」

（……………」（なんかナイス！））

この空気に気づかずヨイリーは話す

「EXEはどれくらい戦闘データを使いこなしているかこれが重要な……………」

そしてそこからクロウとヨイリーは説明を始める

「いいか？EXEの持つ戦闘データを利用すればいくらかでも強くなれる」

「その上その戦闘データから使った能力を使えたら？」

「なるほど……………」

暁とスバルなどの博識な面々は理解したが

ゴン太などは理解してなかった

「まっそんなも！そのデータの容量はかなり重い……………」

「今ほどの圧縮技術があったわけでもないからかしらね」

「じゃあどうやって圧縮を……………」

クロウはヨイリーを一回見てヨイリーと一緒に

「「エクサメモリ（よ）」」

「エクサメモリって確か……………」

「200年前にあった世界最高クラスの圧縮プログラム」

スバルと暁などの博識な面々は理解し話について言ってるが

ゴン太をはじめわかんない者には分からなかった

エクサメモリとはロックマンEXEの持つ世界最高の圧縮プログラム  
を使えばその戦闘データを圧縮したのも納得だろう

「まっこれが単純にもロックマンEXEの力って奴さ」

「……………」

その単純さかそれとも壮大さかここにいる面々のほとんどが沈黙する  
そんな中暁がクロウに言う

「それでアレをやるってわけか……………」

「まあそうだね」

「…………アレ?……………」

「うんアレ」

ちなみにゴン太はすでに頭がショートしている

## 第四十五話　E X Eの力（後書き）

まったくクロウみたいに自分に正直に生きたいよ……

クロウ「おまえ結構正直じゃん」

にしてもクロウってどこがふざけ時でいつが真面目時なんだ？

クロウ「さあゝまあ俺のある特徴がそうしてんだよねゝ」

あとクロウの年齢変更しました

12から15にしました

ある設定を作りたく変えました

まあただのおふざけ設定ですが

第四十六話 アルティメット脳内へ行って来いコンピニ35号（前書き）

次回はレッドスター先生の話と少し被るかもしれませんが・・・

・

あとそのうちレッドスター先生に考えていただいたキャラが出ます

## 第四十六話 アルティメット脳内へ行って来いコンビニ35号

会議から数日がたった

クロウの言った「アレ」とは一体なんなのか……………

「何コレ……………」

この言葉を言ったのはスバルだ

いまこのWAXAワックス&サテラポリスの正面には

巨大な機械が置かれているのだ

大きさは全長5メートル…………いやそれ以上あるかもしれん大ききさだ

「ん？おお来たかスバル！」

気さくに話しかけてきたのは暁だ

暁は前回クロウのやろうとしている「アレ」を知っていた

その暁は気さくに話すが鼻から上に影が少し出ている

そこからスバルは何か起こりそうな予感がしていた

「で、これはなんですか？」

「えっ！？……………」

『どうしました？シドウ？』

「いや……………」

暁が話さないのはそんなに言いたくない名前だからなのだろうか

「おゝいスッバル」

「あっクロウ……………これなに？」

暁が言うのを嫌がったのをクロウはあっさり



「ど、どーもありがとうございます」

なんとたった数分で仕事中のミソラが来た  
しかもリムジンに乗って

「ど、どうやったの!？」

「え〜とね〜」

「アキタか」

「さすが暁よく知ってる〜」

スバルはクロウに聞いても意味がない気がしてミソラに聞く

「ミソラちゃんどういうこと？」

「え?なんか急に仕事終わりって言われて帰ろうと思ったらリムジンが来て」

『ここまで来たのよ』

「・・・どういうこと?クロウ・・・」

結局クロウに聞くスバルであった

「ん?アキタって言う友達がいの〜しかも〜」

『とても徒手茂総理の息子です』

その声と共にクロウの横にヒールが実体化した

「ヒール!実体化できるようになったの!？」

『はい』

「あの〜」

ミソラとヒールの会話にクロウが口を挟むと

「もう四十六話目終わるよ〜」

「「「『』』・・・『』」」」

第四十六話 アルティメット脳内へ行って来いコンピニ35号（後書き）

なんかまた変な終わり方だな・・・

第四十七話 レッソー<sup>♪</sup>脳内へ（前書き）

軽っ！

サブタイトル軽っ！！

まっそんなぐだぐだな話です

クロウ「自分でぐだぐだって言っちゃったよ……………」

## 第四十七話 レッツコー 脳内へ

「なんでヒールがクロウのところにいるの？」

スバルは思ったごく普通の質問をする

遠回しに聞くよりそのほうがいいからだろう

するとミソラはヒールを指差しながら言う

「ん？こうするため」

こうするとは恐らく実体化のことだろう

だがそんなことをスバルが知ってるわけもなく

「どういうこと？」

「だ〜か〜らこういうこと！」

「わかんないよー」

ミソラは恐らく国語の成績は悪い

周りにいる全員が思っただろう

「ん〜まあ簡単に説明すると

ヒールを実体化できるようにっていうか〜まあウィザード化した感じだな」

「それをクロウ君にやってもらうためにヒールを……ヒールPGMを渡したの……」

「へえ〜」

「なあそもそもよお〜」

クロウとミソラの説明が終わるとウォーロックが口を挟み

『ヒールって一体なんなんだ？』

ウォーロックの間にスバル、クロウ、ミソラは

（た、確かに！）

（いまさらか・・・）

（いまさらだね・・・といっても・・・私も知らないんだよね・・・）

「んゝまあ今は言えないけど、フィーリングスがヒントかな・・・」

「「「『えっ！？』『』『』『」」」

『ッ！クロウ！』

そのときはいつも冷静な空気を醸し出しているヒールが取り乱していた

「はいはいメンゴメンゴ」

『・・・・・・』

ヒールから白目で見られているが

クロウは気にせず別の説明に入る

「んで次はアキタだっけ？」

その言葉にスバルとミソラは「コクッ」と頷く

「えゝとあいつはゝさっき言ったみたいにゝ徒手<sup>とても</sup>茂<sup>も</sup>総理の息子なんだあゝ・・・」

「「・・・それだけ！？」」

「うん」

「え、いや確かに総理の息子って何か凄いけど」

「今の説明だと・・・ちよっと・・・」

「でも言った通りだしゝ」

『じゃあもういいから！こっちのバカでけー装置の説明しろ！』

「ん？これもそんまんまだよゝ」

『は？』

「まっやってみたほうが早いな」

「そそ！じゃあはっじめよう」

「何コレ……」

「うん……何コレ……」

『何だコレ』

『何よコレ』

スバル、ミソラ、ウォーロック、ハープの順で言っている

今スバル達は巨大な機械の下の方にある

イスに座っているしかも

手足を縛られて

「「「「……」」」」

「んで！コレで終・わ・り」

ガチャ

するとスバル達の頭に漫画でよく見るような機械が付けられる

「んじゃレッツコー」脳内へ」

そしてクロウがポケットから出した機械のスイッチを押すと……

・  
「「「「な、なにを！？………！」」」」

ガクツ　ガクツ　ガクツ　ガクツ

すると二人と二体は眠った

最悪の悪夢を見るために………

第四十七話 レッツコー ♪ 脳内へ (後書き)

・・・・・・・・・・・・・・・・最近新しいキャラが浮かばない・・・・・・・・  
クロウ「読者の皆様に頼んだら？」

いやそれだとレッドスター先生のパクリみたいだし・・・・・・・・  
まあ考えとくよ・・・・・・・・

クロウ「ZZZZZZZZZZ」

・・・・・・・・・・・・・・・・殴りてえーこいつ・・・・・・・・

第四十八話 脳内にて…（前書き）

少し短いです

## 第四十八話 脳内にて…

「ここは……どこ？」

スバルは真つ暗な空間にいつの間にかいたそこに

『アンニヤロー俺のだけサイズ合ってねえーじゃねーか』

「ロック！」

『ん？おつ！スバル！』

「ロックここどこ分かる？」

『わからねえーとりあえずこれはあのバカが作ったんだろーな』

あのバカとは……当然クロウのことだろう

そしてサイズが合っていないとは先ほどつけた装置だろう

そのサイズがウォーロックに合わなかったのだ

するとスバルは小声で

「（なぜだろうわざとやった気がする……）」

と言った

『ん？なんか言ったか？スバル？』

「なんでもない……ロック……」

『なんだ？』

ちなみに二人は（正確には一人と一体）歩きながら話している

「何か変じゃない？」

『どこがだ？』

「ほら真つ暗なのに僕やロックがハッキリ見えるでしょ」

『確かになんかマンガとかにあるなーこついうの』

マンガみたいなのはほつとくとして

確かにおかしい現象ではある

いくら目が暗いところに慣れようとこんな現象はありえないだろう

しかしそんな現象を起こせるのが

「クロウなんだよね」

『あのバカならありえなくもねえーな』

すると

ピンポンパンポーン

『あーあーただいまマイクテスト中』

ズルッ

『んなことせんでも聞こえるわ!』

「この声はクロウだね・・・」

『いやゝいいズツコケだったね』

『黙れ!』

『でもウォーロックのズツコケいまいちだったね』

『だーかーら黙れ!!』

このコントがしばらく続くのでまた少し飛ばそう

「で?これは、どういうこと?」

『ん?あゝまってそろそろ終わりだから』

「何が?」

『今回の話』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

第四十八話 脳内にて…（後書き）

ちなみにクロウの台詞が二重鍵括弧なのはマイクを使っているから  
とか思ってください。

にしてもまためちやくちな終わり方………

第四十九話 VS ハープ・ノート！？（前書き）

なんかまたぐだぐだになりそうな予感

## 第四十九話 VS ハープ・ノート!?

『え〜ここは〜……………』

「『?』」

『ん〜なんて言おうか……………』

イラッ

『早く言えコラあ—————』

普段のクロウへの怒りが爆発したのかウォーロックは切れて暴れてしまう

しかしクロウの音がするだけでどこに暴れても無意味だった

『ぜえぜえ』

「ロック落ち着いて」

『……………あつ終わった?』

『無視すんなあ—————!!!!』

『も〜うるさいなあ〜俺今寝起きなんだけど〜』

『寝んなあ—————!!!!』

『んじゃあこの説明に戻ろうか〜』

『おう!』

「うん」(なんでだろうロックから凄い殺気が……………)

『え〜ここはね〜君達の脳内だよ〜』

「『は?』」

『あつ、ごめん正確にはスバルの脳内だよ〜』

「『はあ？』」

『さっきの装置あるじゃん？それ使ってスバルとウォーロックをスバルの脳内へ送ったの』

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

『あのさ、なんで俺が話すとみんな黙ったりすんの？』

黙るのも当然だという事もクロウは恐らく知っているだろう  
なぜなら彼は自分がおふざけキャラだと知っているのだから  
まあ黙る理由も納得だろういくらなんでも常識外れすぎるからだ

『まあようするに自分を精神意識内に無理やり送り込む装置ってとこだね』

「はあ・・・・・・・・」

『もつとわかりやすくしろ！！』  
博識なスバルは多少理解したがガサツで勉強嫌いのウォーロックには理解できなかった

「まっこれからやるレクリーションに成功したらちゃんと教える」  
（もうちゃんと教えたけど・・・）

「レクリーション・・・・・・・・」

『なんだそれ？リエーンジュか？』

「それはベルギーの電波都市！！」

『よく知ってたなウォーロック程度が・・・・・・・・』

『俺程度ってなんだあ・・・・・・・・』

『まあまあ』

『だから黙れ・・・・・・・・！！！！』

『んじゃ始めるか』（地獄）のレクリーション』

「地獄」とクロウはボソツと言ったたがスバルとウォーロックには聞こえなかった

『そのー VS○○○だよ』

（（大事なとこ伏字だぁー！！！！！！！！！））  
『安心しろって！これから出てくるから！』

パチン！

その指鳴らしと共に

スバル達から約10メートルほど先に

黒いハープ・ノートが立っていた

「ハープ・ノート？」

『………！スバル離れる！！』

「え？」

「………！（ショックノート！）」

「え！？」

ドギューーーーーー

#### 第四十九話 VS ハープ・ノート!?(後書き)

なんかちよつとすごい展開になってきたな

あとベルギーとはベルギーを元にしてます  
リエージュはリエージュというベルギーの工業都市を元にし  
ました

**第五十話 精神意識内にて？（前書き）**

ついに50話です！

ここまで支えてくれた皆さん感謝します！

あとタイトル変更しました

## 第五十話 精神意識内にて？

ドサッ

『スバル！！』

『ありや！もう終わり！？』

『てめえ！あいつは何なんだ！？スバルをどうした！？』

『んゝ教えてもいいけど』

『あ？』

『後ろ』

その瞬間、黒いハープ・ノートの攻撃がウォーロックに炸裂する

ドギューーーーーーン ドサッ

『ぐ．．．スバル．．．』

ムクッ

『あれ？』

『え？』

これ以上なくシユールな空気が漂う

それもそのはず電波人間と思われる黒いハープ・ノートの攻撃をまともにくらった

ただの人間のスバルが起き上がったのだ

『あれ？どうということ？』

『．．．．．え？．．．．．』

『あゝ言い忘れたけど』

この空間はスバルの精神意識内……  
つまりスバルの心の中だつまり……  
ぶっちゃけ念じれば何でも出来るってわけ」

『え……つまり……』

『うん！もちろん肉体へのダメージはナッシング』

『え……じゃあ……』

『ウォーロックのダメージもないよ』

（（え……でも痛みあったような））

『それはお前らが「痛い」と思い込んでたからです  
「なるほど」』

『よくわかんねー（てか何で心読めたんだ？）』

『まっ後はナレーションに任せる』

任されたので説明しよう

精神意識内……もとい心の中では自分の自由に何でも出来るって  
言ったところだろう

例えば一瞬で地球の反対側に行きたいとか何でもありだ

『ナイスナレーション』

『なるほど……』

『？？どういうことだ？』

博識なスバルは多少理解したががさつで勉強嫌いなウォーロックに  
は理解できなかった

『じゃあ……』

『あっ先に言うけどあの黒いハープ・ノートを何とかしてくれとか  
は、なしね

そういう風に細工したから』

『ちっ！』

『どうしたの？ロック？』

『俺はあいつが嫌いなんだ！そんな奴の……』

「ロック・・・」

『（嫌われたもんだな・・・）』

そのクロウの声は誰にも聞こえなかった

「とにかく、電波変換だ！」

『おう！』

「トランスコード シューティングスターロックマン！！」

『行くぞ！スバル！』

「うんでも・・・相手は・・・」

『いや・・・攻撃してきたって事はあいつはミソラとハープじゃねえ  
ー』

「そうだねじゃあ行くよ！」

そしてロックマンは高らかに言い放つ

「ウェーブバトル！ライドオン！！」

「・・・・・・・・・・」

第五十話 精神意識内にて？（後書き）

今回ナレーションが少ない・・・

## 第五十一話 強化！？ハープ・ノート

「ロックバスター！」

「……………（ショックノート）！」

ロックマンと黒いハープ・ノートの放った攻撃はぶつかり相殺されるこの戦いが始まってもう20分がたつ

しかし戦いは動かない

その理由は単純明快

『くそっ！あいつずっと距離を置きやがる！』

そうずっと黒いハープ・ノートは距離を置いて戦っている

そうすることで遠距離対決にしているのだろう

なぜか言っと

「バトルカードが近距離用ばかり……………」

『おかしいなスバルのフォルダは結構万能型のはずなんだが』

フォルダとは流星のロックマンのゲームをやってる人は分かると思いますが

一応説明をします

フォルダとはウェーブバトル時に使うカード群で

バトルカードはその中から選び使われる

と、いったところだろう

「なんでこんなバトルカードばかり……………」

『あゝそれオレオレ』

『てめえかぁ————』

『うん俺』

「ロック落ち着いて！」

ロックマンはウォーロックを抑えるが黒いハープ・ノートは待ってくれず

「……………（ショックノート）！！！」

音符型の弾丸がロックマンたちに向かう

ロックマンはその攻撃に気づくがもう遅くまともに受けてしまう

「うわぁーーーーー」

『ぐはぁ』

まともにくらったロックマンは倒れかける

『ぐ・大丈夫か・スバル』

「うん・ただあの（黒い）ハーブ・ノートの攻撃の威力・」

『ああ、おそらく・』

『ん？気づいた？うん、そう

あの黒いハーブ・ノートの攻撃力だけは

本来の数倍だよ』（まあ正確にはミソラちゃんが優すぎるから威力が下がってるんだけど）』

ようするにハーブ・ノートつまりミソラが優すぎるから本来の攻撃力より威力が下がってるのだ

「ロック・」

『へっ！わかってるよ・もう十分いけるぜ！』

「わかった・いくよ！」

「『ノイズチェンジ！ イヴァルヴノイズ！！』」

するとノイズがロックマンを包み

そしてその数秒後ロックマンはイヴァルヴノイズにノイズチェンジしていた

「・（ショックノート）！」

再び音符型の弾丸がロックマンに向かう  
すると

スッ

ロックマンは右手を前に出しショックノートを受け止める

「！！！」

『ほゝなかなか進化してるなあ』

「いくぞ！チャージ！ロックバスター！！！」

## 第五十二話 進化！？（前書き）

・・・はぁ・・・

クロウ「どした？」

いや実は、嫌な事があつて・・・

クロウ「（マジバナ来たよ・・・）」

なんか言った？まぁいいや

本編へどうぞ

## 第五十二話 進化！？

「いくぞ！チャージ！ロックバスター！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（マシンガンストリング）！！」

ロックマンの放った強化されたロックバスターと

黒いハープ・ノートの放った弦が盾になり

ぶつかり

ズドォーーーーーー

そのときスバルが

「ロック・・・・・・・・」

「なんだ？」

するとロックマンは自分から右方向を指差す

「あつちに（黒い）ハープ・ノートが逃げた・・・よね？」

「へ？」

「あれ？見えなかった？」

「あ、ああ」

「（驚いたな・・・・・・・・ここま感覚が磨かれるとは）」

スバルもといロックマンよりも戦闘経験のあるウォーロックが

敵が逃げたのを見逃すとは思えないがそれほどの爆風だったのだろう

しかしそのウォーロックが見えなかったのにスバルが見えた

これは恐らく

「（エボリユートPGMの力か）」

クロウはエボリユートPGMの力は付けた電波体の強さを一段階上

に連れて行くと言っていた

しかしそれは真っ赤な嘘だ

正確には付けた電波体と電波変換している人間もとい電波人間に作

用する

つまりエボリユートPGMの力が作用したロックマンの感覚器官は  
ウォーロック以上という事になる

『（これがエボリユートPGMの進化の力か……）』

「どこだ？」

キヨロキヨロ

『スバル、あんまキヨロキヨロすんな！気配が……消えち  
まった』

「えっ!？」

『（うーんでも中身は進化してないっばい……）』

すると遠くから楽器の様な音が響く

フオーーーーーー

『!……今の音は!？』

「うん（黒い）ハープ・ノートのだね」

『よしこれでどこにいるか分かるぜ!』

ウォーロックが腕をぐるぐるしながら動くと

「待って」

ロックマンはウォーロックの首(?)を掴む

『ぐえっ』

「あつごめん」

『ゲホッ・ゲホッ、で?なんだ?』

「えゝと多分あつちだと思って」

『へ?な、なんで!?あつちで音がしたぞ!』

「それは・・・」

## 第五十二話 進化！？（後書き）

またまた○クマン。っぽい引きです！

まあ終わらすタイミング見失っただけですが・・・

## 第五十三話 ピンチ！？ロックマン（前書き）

どーもなんと今回から50話記念ってことで

キャラの人気投票とオリキャラ募集を行いたいと思います。

ちなみに同じ事が活動報告にも書いてあります

## 第五十三話 ピンチ!? ロックマン

「それは．．．．勘？」

「はあ? どういう．．．．」

「そういうことじゃね?」

突然クロウが話しに入りウォーロックはまた切れる

「話に入ってくんじゃねえ!!」

「いいじゃゝん俺もつとボケていたいの!!!」

「『．．．．．』」

ストレートな「ボケたい」発言にロックマンとウォーロックは呆れている

「あ! そうだゝ二人とも」

「『ん?』」

「後ろ」

なにかデジャヴなのは気にしないでとしてロックマン達の後ろに

黒いハープ・ノートが攻撃の態勢でいた

「やめなよ．．．君の攻撃は僕には利かないの分かってるだろ．．

．．」

「!．．．．．（マシンガンストリング）!」

黒いハープ・ノートの持つギターから弦がでてきて

ロックマンに向かって飛ぶ

「．．．．．ロックバスター!」

デュン ボンッ

ロックマンの放ったロックバスターはマシンガンストリングをあつさり灰と化する

「これで終わりだ！」

ダッ

『スゥバール』

そこでロックマンは走るのをやめる

「何？クロウ」

『もしもあの黒いハーブ・ノートのダメージが本物のミソラちゃんとリンクしてたらどうする？』

「『！！！？』」

ダメージがリンク・・・つまりもしも黒いハーブ・ノートが右手に怪我したら

ミソラも右手に怪我をするってことなのだ

そんなことを言われ黒いハーブ・ノートに攻撃する気持ちがなくなってしまう

そしてロックマンは黒いハーブ・ノートに向かって動けなくなってしまう

『（まっ冗談なんだけど）』

「！！！！！！（ショックノート）！」

ドゴッ

「ぐはっ！」

いくらノイズチェンジしているとはいえ攻撃力の高い攻撃を  
まともに受けたロックマンは倒れる

『スバル！？クロウてめえ！！！！』

『なーに俺は――』

『このやろー！』

クロウの言葉を聞かずウォロックは爪を立てながら黒いハーブ・ノートに突っ込む

「・・・・・・・・（パルスソング）！」

しかし近づきすぎたがために

黒いハーブ・ノートの近距離技をくらってしまっ

「ぐはっ！」

「あーあ大丈夫かな？」

## 第五十三話 ピンチ!? ロックマン（後書き）

上にも書きましたが

キャラの人気投票とオリキャラ募集を行いたいと思います。

えゝ人気投票のルールは下に。

1 1人の投票権はいくらでもです、ただし同じキャラへの投票は不可。

2 期限は「流星のロックマン 大切な絆の物語」が100話まで行ったらです。

オリキャラの方は

1 名前

2 性別

3 性格

4 話し方

5 設定またはどういう風に使って欲しいか

まっ！そんなところです

待ってます！

## 第五十四話 進化する何か（前書き）

更新できなくてすみません！

## 第五十四話 進化する何か

「（ん？あれ？今回は怪我が・・・）」

『（なおらねえな）』

黒いハープ・ノートの攻撃を受けロックマンのどこまで吹き飛ばされたウォーロックと

黒いハープ・ノートの攻撃で動けなくなったロックマンは小声で話す

『（ん？小声で話してるな・・・まっ・・・いつか）（黒い）ハープ・ノート』

「・・・」

『ロックマン達が動くまで動かなくていいよ』

「・・・」

「（そうか、僕達がダメージを受けてるって思い込んでるからだ！）」

「

『（そっぴやあいつも言ってたな・・・）』

ウォーロックはクロウの声のする方向を睨む

『（ん？なんか殺気が・・・）』

（僕は怪我してない僕は怪我してない）

（俺は怪我なんかしてない俺は怪我なんざしねえ！）

そう思い込んでいると

パッ

あら不思議怪我が見る見る治っていきます

「治った！」

『（バ、バカ！スバル！まだ動くな！）』

「え？」

「……………（ショックノート）！！」

「あぶなっ！」

ロックマンは黒いハープ・ノートの放った攻撃を危機一髪で避ける

「……………（マシンガンストリング）！」

再び黒いハープ・ノートの攻撃がロックマンに向かう

「くっ！ミソラちゃんとあの黒いハープ・ノートのダメージがリンクしてるなんて……………」

【・び・…え】

「！？」

『どうしたスバル！？』

ロックマンは避けながら話す

「今何か聞こえた気がするんだけど、ウォーロックは聞こえなかった？」

『ん、ああ』

『！なんだって！？』

クロウは珍しく取り乱す、そんなクロウにウォーロックは不信に思う

『（あいつまた何か考えてるな……………）』

現実世界

「（まずい！まずい！さすがにこれはまずい！）」

クロウは変わらず取り乱している

そこに暁が話しかける

「どうしたクロウ．．．．．」

「暁か．．．．．」

クロウは息遣いは荒いが焦った表情を直す

「どうしたんだ？クロウ．． お前がそこまで取り乱すのはあの時以来だな」

「なんだよ？俺が取り乱す事もない血も涙もない人間だとしても？」

「格好つけんなよ！お前の本心が聞きたい．．．．聞かせてくれ」

「．．わかったよ．．．．．」

精神世界

【くび．．．え】

「まただ．．．．．」

『なんなんだ？全然聞こえねえーぞ？』

「少し黙っててロック．．．．．」

『え！』

ウォーロックは少しショックを受けている

それもそうだいつものロックマンもといスバルは人に

「黙ってて」とか言わないのだから

「．．．．．（マシンガンストリング）！！」

【．．．．．】

「そうか！そういうことか！」

## 第五十四話 進化する何か（後書き）

今回はまた番外編です。今更ながら番外編多いなこの小説……

・ あっあとオリキャラ&人気投票待ってます！

クロウ「にしても俺のキャラを引つ掻き回すな〜この根暗作者」  
いや〜レッドスター先生んとこでゲスト出演してもらった時に

「クロウはギャグキャラで終わっていいのか？」

と思ってね……………

クロウ「（そんだけの理由で俺はここまで引つ掻き回されたのか……）」

## 番外編其の？ 歌ウマ大会

作者「はい！ども！また番外編です！！」

クロウ「番外編好きだなこの作者……」

作者「実は番外編はあんま考えないで書いてんだよね」

「おいおい大丈夫がこの小説……」

クロウ「おおっ！ウォーロック！」

ウォーロック「こんな作者のキャラとか最悪だ」

作者「……」

ポンッ

作者「肩に手置くなあーーーーー」

クロウ「ちっちゃいこと気にすんな」ワカ「黙れ！」

作者「（てかなんで知ってんだそのネタ200年前のだぞ……」

・）

クロウ「知らん！」

作者&ウォーロック「あつそ……」

ウォーロック「で？ここは何だ？」

作者「ふっふっふっそれは——「うわっ！？何ここ！？」」

クロウ「スバル」空気読め」

スバル「え……なんかごめん」

作者「それでは————カラオケ大会始め————」

「『カラオケ？』」

作者「何！？お前からカラオケ知らんの！？」

クロウ「俺知ってるよ」

スバル「僕も一応……」

ウォーロック「カラオケ？なんだ？あの揚げ物か？」

スバル「それはから揚げ……」

ウォーロック「じゃああの人を入れる……」

クロウ「それカンオケだよ」

スバル「棺桶でしょ？」

作者「おい作者を忘れるな」

クロウ「で？何すんの？」

作者「カラオケ」

スバル「そのまんま？」

作者「はい」

クロウ「誰から歌う？」

ウォーロック「あつ歌うのか……」

作者「ちなみに審査員はクロウとスバルが喜ぶかもな人です」

スバル「誰？」

クロウ「なに？ハンバーグステーキ？」

作者「それ食いもん！！」

クロウ「じゃあ何なんだよ！？」

作者「逆ギレ！？」

スバル「で、誰ですか？」

作者「はあ……なんでわかんねーかな……」

クロウ（まあどーせミソラちゃんだろうな）

作者「あつ正解！」

「『（あつけな！）』」

作者「それでは登場してもらいましょう！響ミソラさんです！」

シャーーーーー  
↑カーテン開く音

ミソラ「……」

「『あれ？無言！？』」

ミソラ「だって登場するのに時間かかりすぎて……」

クロウ「ああすねてんのか……さっすがミソラちゃん！かわ

「『黙れ変態』」

クロウは精神的ダメージを受けた

作者「さていいかげん始めるぞー、エントリー？1番！」

デレレレレレレレ

デン！

クロウ「作者です」

作者「違う違う！」

クロウ「ちがくない！ちがくない！」

作者「いや！絶対違う！」

クロウ「じゃあなんで（根暗）作者が選ばれたの？」

作者「知らん！あと！根暗作者って何だ！？」

ミソラ「じゃあ作者さんの「スットンスットンスッポン」です」

作者「何だそれーーーーーてかお前までボケたらおしまいだろ  
ーーーーーがーーーーー」

ミソラ「それではどうぞ！」

♪ スットン スットン スッポポポポポーン ♪

「「「『何これ！？』」」」

数分後

ミソラ「エントリ？2番星河スバル君です！」

クロウ「というか作者生きてる？」

スバル「あっ脈止まった」

ミソラ「歌う曲は「燃え上がれ！我等のロックマン！」です  
作ってくれたのは秋田県のアキタさんです！ですがすぐに飽きても  
う歌う気はないようです」

作者「俺忘れられてる……………」

ミソラ「それではどーぞ！」

テンテレ テレテレ テンテン パフッ

「「「笑○！？」「」」

ミソラ「それではエントリー？3番クロウ君です！」  
クロウ「あつ俺辞退します……………」

ミソラ「はいわかりましたー」

「「『かるっ！』『」」

ミソラ「それではラストは……………」  
スバル「ま、まさか……………」

作者「あ、あいつか！？」

「「『あれ？いつ生き返ったの？』『」」  
作者「さつきからじゃー！」

ミソラ「歌うのは…………ロック君です！」

（（（やっぱり…………）））

スバル、クロウそして作者は絶望した  
絶望のどん底だ……………

ミソラ「ロック君が歌うのは「○の風になって」」

「「「暗っ!」「」」

ミソラ「それではどうぞー」

ウォーロック『すうーーーーー』

ボエーーーーーッ

「「「ぎゃあああああああああああ」「」」

またまた何人か倒れたので終了です。

番外編其の？ 歌ウマ大会（後書き）

長っ！今回長っ！

あっオリキャラ&人気投票待ってます

## 第五十五話 終了・・・

（現実世界）

「クロウ・・・なにがあつた？」

「・・・やっぱ話さないとだめか？」

「ああ」

「そうか、まず――」

暁とクロウの話し声は誰にも聞こえてはいなかった  
風にまぎれて

（精神意識内）

『わかつたつて何がだ？スバル』

「あそこを狙えば・・・」

ブツブツ

『聞けよ・・・』

「行くよ！ロック！」

『お、おう』

「・・・（ショックノート）！」

「ロックバスター！」

ショックノートとロックバスターはぶつかり消え去る

「今だ！ロック！」

『おう！』

「『オーバーチャージ！ロックバスター！！！！』」

ゴォーーーーーー

「!!.....」

黒いハープ・ノートは間一髪で

ロックバスターをかわすが

シャツ

ロックマンに後ろを取られる

『今だ!スバル!』

「うん」

ロックマンは黒いハープ・ノートの首を

トンツと叩く

すると黒いハープ・ノートは倒れる

ドサッ

く現実世界く

「!倒したか.....」

「クロウ!今の話は本当か!?」

「ああ.....こうするしかなかったんだ.....」  
「くっ」

「さて出してやるか」

クロウはそいうと装置のボタンを押す

く精神世界く

「ふうー」

「何をしたんだ？スバル」

「え？ただ首を狙っただけだけど」

「？」

パ  
ア  
ア  
ア

するとロックマンとウォーロックを光が包み、消えると

第五十六話 拉致っちゃん？（前書き）

えゝ今回はミソラの精神世界・・・といきたいのですが！  
そこはショートカット！！！！ってことで  
手抜き？いえいえまさかゝ

## 第五十六話 拉致っちゃえ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？ここは・・・」

スバルは気づくとベッドの上に居た

「おっきた〜？スバル♪」

そこにクロウ参上だ

「え？うん・・・ここは？」

「<sup>ワクサ</sup>WAXAのベッドだよ」

「そう・・・・・・・・！ミソラちゃんは！？」

「安心しろもうとつくに目覚まして仕事行ったよ〜」

「そっか・・・・・・・・」

先に言うが先程がクロウ言った「黒いハーブ・ノートとミソラのダ  
メージはリンクしている」

というのは嘘だその真意は・・・・・・・・

「クロウ・・・・・・・・さっき何で「その件は悪かった」・・・・・・・・」

クロウに久しぶりに遮られスバルは苦笑する

『やっぱり嘘だったのか・・・・・・・・』

「あれ？居たのロック？」

「全然気づかなかったよ〜ん」

『嘘つけ！！てかスバルも！？ケツ！』

ウォーロックはすねて部屋をでる

「クロウどういうことだったの？」

「ありゃ〜ん〜メンタルトレーニングと狂化トレーニングだよ」

「（強化が狂化になってるのは無視しとこう）メンタルは分かるけど狂化トレーニングって？」

「簡単に言つと・・・・エボリユートPGMの進化力を上げるってとこだな」

「進化力・・・・・・・・」

進化力とは恐らく進化する段階の狂化といったところだろう

「ナレーションご苦労さんまっようするに

エボリユートPGMの力は付けた電波人間を一段階上に進化させるでも・・・それだけじゃないんだ」

「それだけじゃない？」

「エボリユートPGMはさらに上に連れてくんだ」

「さらに上についてどういう――」

ガラッ

扉が開くと黒い服の黒いグラサンの男達が入ってきた

「お迎えにあがりましたクロウ様、星河様」

「へ？」

すると黒いグラサンがスバルを掴み（かなり乱暴に）外に連れて行き

長~~~~い車に放り込む

「ご苦労さん」

クロウもいつの間にか乗っていた

ブウウ~~~~~ン

「クロウこれって・・・」

クロウはにつこりして答える

「拉致！」

「うそ~~~~~」

第五十六話 拉致っちゃん？（後書き）

投票＆投稿待ってます！

第五十七話 クロウの家（前書き）

まさかの・・・今日三回目！？

## 第五十七話 クロウの家

「いやゝスバルゝまさかあんな方法で倒すとはゝ（棒読み）」

「（棒読みだ・・・）いや何か聞こえたから」

『だから聞こえたってなんだ！？どうやって倒した！？』

「あつロック戻ってたの？」

「影薄いなゝ」

スバルの「戻ったの？」には怒らなかったがクロウの「影薄い」に  
ウォーロックは軽く切れる

『黙れ！・・・で！どうなんだ！？』

「あつ僕の質問も」

「めんどゝ」

キキッ

するとこの長〜〜〜〜い車は止まった

「あれ？ここって」

『なんちゃらスタジオか・・・』

「オクダマだよゝん」

『うぜゝ』

すると近くで女の子の音がする

「あのゝなんですか？コレ」

ピクッ

「今の声は！」

「ミソラちゃん！？」

スバルは大きな声をあげるが

「「『・・・・・・・・・・』」「」

「あれ？」

「いやスバル君いいんだよ？別に驚いても……でも……」

「うんあんな大声上げる必要ないよな」

『まったくだ』

ガーン

スバルは精神的ダメージを受けた

恐らく30ダメージぐらいだろう……

ブーーーーー

さっきのやり取りから数分経過している  
スバルはもうダメージから回復している  
回復早いのは気のせいだろう

「そういえばどこ向かってるの？」  
ガサッ

「ん？俺んち」

「俺んちって……クロウの？」

「うん」バリッポリッ

クロウは煎餅を食べながら答える

「あつミソラちゃん食べる？いろいろあるよ？」

「あ、ありが——ん？」

キキッ

「到着しました」

「ご苦労さん」

そこは・・・そこは・・・

超高層マンションだった・・・恐らく億ションだろう・・・

「ドヤッ!...!」

## 第五十七話 クロウの家（後書き）

最後ドヤ顔って・・・・・・・・・・  
実はクロウお金持ち疑惑！？・・・・って感じですね

第五十八話 クロウの家其の2（前書き）

登場してないだけでハーブとヒールはミソラといいますよ……

## 第五十八話 クロウの家其の2

『マ、マジかよ……』

「う、嘘」

「すっごいね」

「はいども皆！皆大好き準主人公のクロウだよ！

今俺んちにミソラちゃんと愉快的仲間達が——『うるせえ！

—————！』」

そのときのスバル、ミソラ、ハープの心の声はこうだ

（準主人公？）

（なんで私だけ名前呼ばれたの？）

（ミソラに手を出したら）ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「まーいいや早く入ろうぜ？暑いし……」

「そ、そうだね」

「なんか楽しそうだなー」

コツコツコツコツコツ

クロウの家・もとい高層マンションの中に入って数秒して  
スバル達は立ち止まる

「これって……」

「ん？顔認証システム」

『顔認証ってなんだ？』

「ナレーション」

何かナレーションをいのように使われてるのは気にしないとして顔認証システムとは現代でも存在する

顔を記憶してその顔の人が通ったら扉が開くといったシステムだ現代では基本セキュリティとして使われているが

ATMに使われるとも考えられている・・・らしい

あくまでもこれは作者の知っている範囲の話なので

詳しいことを知りたかったらウィキペディアで検索してください

『長くて余計わかんねー』

「私も混乱してきた」

『つまり顔を認識してそしてその顔なら通れるということですよ』

「なるほど！さすがヒール！」

『いえ（ナレーションを少し変えただけです）』

「まあ安心してよミソラちゃん達の顔は登録してあるから」

「あっ開いた」

「本当だ！」

『すげえ！』

「んで！ここが俺の使<sup>つか</sup>つてる部屋だよ」

この部屋を絵で見れたらあのシーンを思い出す人は多いだろう

め〇かボックス四巻の黒神〇黒の登場したシーンだ

そこには響ミソラグッズが大量にあった

フィギュア、ポスター、人形、そしてなぜかパソコンのディスプレイまでミソラだった

ずずうううーーーーーん

『『『………』』』

スバルとウォーロックとハープはあまりのフアン<sup>キモさ</sup>ぶりにひくひくしている

ミソラは「自分のファンなんだ」と素直に思っていた  
ちなみにヒールは

『（下種虫………）』

虫扱いだそれも下種を付け足して

そしてクロウの部屋であることが始まる

第五十八話 クロウの家其の2（後書き）

なんかまたまた終わり方不自然・・・..  
にしても昨日の三回も更新したのは疲れたな

第五十九話 人〇ゲーム！？（前書き）

サブタイトル付け忘れました！

## 第五十九話 人○ゲーム！？

「1、2、3、4、ゴール！」

「ま、またミソラちゃん一位……」

『ウオリヤー』

ぐるぐるぐる ピタ

「1だ……」

『またかよー……』

『今10億ゼニ……』

さあ今何をやってるかこれらの言葉から整理しよう

ゴール〓すぐろく？

ぐるぐるぐる〓ルーレット？

10億〓金のあるルール？

「疑問系じゃねーか」とか言われても……

まあ家族や友達や子供とよくやるアレだ

そう！

人○ゲームだ！

スバル達は今「人○ゲーム」をやっているちなみに今3週目だ  
ついでに状況も説明しよう



電話をかける

P i P i P i

P i R i R i R i R i

『はい？もしもし今眠いんだけど』

「出前一丁」

それだけ言いクロウは電話を切る

ブツッ

ツーツーツーツー

「『『『え？』』』」

「なに？」

「今の誰って言うか」

「うん今ので」

『通じんのか！？』

『頭が痛くなってくるわ』

『だからクロウはバカで下種で虫でゴミなんです』

「ヒ、ヒール・・・言い過ぎ」

そんな会話が続くと

ピンポーン

「ピザの出前<sup>デス</sup>DEATHよ」

「あつ来た来たーあつ俺のかわりにスバルでて」

「あれ？ピザなんて頼んだっけ？」

「あとなんで僕」

「いいからいいから」

スバルがドアの前に立ち恐る恐る扉を開けると

「おら！ピザ一丁！」

パ  
ア  
ア  
ン

顔にピザを叩きつけられスバルは気絶した

## 第六十話 アキタ（前書き）

同時期に始めたレッドスター先生の作品が100話に!？  
マジか・・・・・・・・こっちはやっと60話か・・・・

あらすじ 「ピザ一丁」

あとちょっと短めです

## 第六十話 アキタ

「ス、スバルくん!？」

「あれ? クロウじゃない?」

「サンキュー スバル………っ ていてて!」

クロウは突然耳を引つ張られた、引つ張ったのは

『スバルさんに迷惑をかけるんじゃないやありません!』

ヒールだ

「お母さんか!」

「スバルくん大丈夫?」

「………」

どこからかちーんという音が聞こえる

『ご臨終だな………』

『どこで覚えたの? その言葉………』

「う、うーん」

スバルは目を覚ます

「あひゃ? おひた? スヒヤル?」

いまクロウはヒールにほつぺたを引つ張られてる状態だ

言い方がおかしいのはそのせいだ

ちなみに「あれ? 起きた? スバル?」だ

すると

『お久し振りですアキタさん』

ヒールはクロウのほつぺたを放してそこにいる人物に話しかける

「ん? その声はヒールか?」

『はい』

「そっか」

そのときスバル達の出した言葉は



## 第六十一話 謎解明！（前書き）

一週間も更新できなくてすいません！

一応あらずじ書きます

クロウの家に来たスバルとミソラ+ウィザード2体は  
なぜか人○ゲームを始める

そんな時クロウの呼んだ人物アキタがやってきた  
しかし！アキタは寝てしまいなんとクロウも寝てしまう！  
そして数々の謎が明かされていく！

「なんかちがくね？」

気にすんな、あと久しぶりで全然ネタがなく短めです

## 第六十一話 謎解明！

クロウとアキタが寝て数分後クロウの住む高層マンションからは  
断末魔の叫びが木霊する

「ぎゃあああああああああああ」

その声をあげてるのはクロウとアキタだ、なぜこんな事になってる  
かそれは――

ヒールの拷問にあってるからだ

詳しい事は………言わないでおこう

『あなたたちいい加減にしないで！』

「『こ、怖い………』」

電波体単体でも十分な強さを持つウォーロックでさえ彼女には恐怖  
している

「いぎゃあああああああああ」

ホラー映画でありそうな叫び声が聞こえる

（数分後）

『反省しましたか？』

「は……い………」

「『怖い怖い怖い！』」

ヒールのその『反省しましたか』も恐怖するほど怖い声だった

そのときの空気に耐えれずミソラは口を開く話す

「大丈夫？クロウ君、アキタさん」

「あり・・・がとミソラ・・・ちゃん・・・」

「ど・・・も・・・」

二人とも声が上手く出せないほどダメージを受けていた

　　さらに数十分後

「さて！話を始めよう！」

「そう・・・だね・・・（眠い・・・でもヒールが・・・）」

「ところで何を話すの？」

「さっすがミソラちゃんよくぞ聞いてくれた！」

「平たく言つと謎解明？」

「『『謎？』』」

「1つ目はなぜ俺の家に来たか、2つ目は――」

「『『？』』」

「次回に続く！」

「『『今やれ――！――！――！』』」

第六十一話 謎解明！（後書き）

いやゝ何度目だろゝこの変な終わり方♪

## 第六十二話 謎解明！其の2（前書き）

最近ネタが浮かばない！

誰かネタプリーズ！（冗談）

しかもネタがなくて短いです！

## 第六十二話 謎解明！其の2

「2つ目は．．．．．なんだろう．．．」

「『『へ？』』」

「いやガチで、あんま考えてなくってさ」  
『．．．．．』

ヒールからクロウに冷たい視線が送られる  
そんな中クロウとアキタは小声で話す

「（．．．．．殺される？俺達．．．）」

「（かも．．ね．．）」

『何か言ってますか？』

「『いいえ！（怖い！）』」

クロウとアキタの言葉と心の声がシンクロする

「ま、まあみんなの疑問解決って事で！何か質問していいよ！」

「まず．．そこの．．ツンツン頭．．．君．．．」

「え！えーと．．．．．」

「はい！ない．．．．．」

再びヒールからの冷たい視線を受けるクロウ

「わけないよね！」

「え、うん、えーと．．．．．」

「なんであんな特訓法を？」

スバルの言う特訓とは

あの黒いハープ・ノートとの戦いのことだ  
「前にも言っただけメンタルを鍛えるため」

「なんでメンタル？」

「さすがミソラちゃん良くぞ聞いてくれた……」

クロウはいつもの明るい表情をなくし真剣な表情になる

それにはアキタとヒールを除く全員が驚く

そんな中ウオーロックとハーブは

（な、なんだこいつ急に）

（心が静かになった！？）

F M 星人は人間の弱い心に付け入りその体に乗っ取る事ができる A  
M 星人も同様

裏を返せば人の心の乱れや変化に気づきやすいという事でもある  
それだけ今クロウの心は静かなのだ

いや更に静かになったの方が正しいだろう

話を戻して「なぜメンタルを鍛えたか」だ

「君達は奴ら……フィーリングスを倒せるか？」

「『『『！！！！？』』』」

## 第六十二話 謎解明！其の2（後書き）

F M 星人はゝのところは僕の仮説です

本当かどうかは分かりません

あとネタ作りに集中したいのでしばらく書けないかもしれません

第六十三話 「戦えるか？」（前書き）

どーも！お久しぶりです！

全然更新できなくてすいません！

正直言つとやる気でなかったりやりたいことがあったり

ネタがなかったりそしてPC使う時間がなくて・・・

最近ではネタが全然浮かばなくて短めです

## 第六十三話 「戦えるか？」

「どういう・・・こと？」

「簡単に言えばスバルとミソラちゃんて戦ってくれて言ってるよ  
うなもんな」

「「「「「・・・」」」」」

その沈黙が終わるとクロウはいつもの明るい表情が戻る

「まっ！つまりこうことか——な！」

その「な」を言った瞬間クロウはスバルの腹を蹴る

スバルは不意をつかれたのもあり壁に叩きつけられる

「がふっ」

「スバル君！？」

「スバル！」

ミソラとウォーロックがスバルを心配する中ハープは冷静に

「どういっつもり？」と聞く

しかしその質問をクロウは

「ん？どういっつもりかね？まあ考えとくよ」

と適当に返す

『てめえ！俺達の敵だったのか！』

「それは違う」

『！——』

「まゝこれは修行だと思えばいいよ 電波変換」

カツ シュツ ドゴツ

一瞬にしてクロウは電波変換して  
ウォーロックに攻撃する

『ガハツ！何だ今のスピード！？』

「今のが・・・まあ光化電波変換（こっかでんぱへんかん）つてとこかな  
まあ安心してよ電波変換する時間はあげるから」

「クロウ・・・」

スバルは涙をためた目でクロウ・・・ブルース・クロウを見る

そして数秒後スバルとミソラを光が包み  
ロックマンとハーブ・ノートに変身する

「クロウ君・・・なんでこんなことするの？」

「・・・」

「まあさつきもそうだけど答える気は————ない！」

するとブルース・クロウは勢いよく剣を振るう

その振った剣から放たれた衝撃波はロックマン達に向かって飛ぶ

そして強い爆風が起こる

第六十三話 「戦えるか？」（後書き）

やっと書けた・・・

ぶっちゃけここまで書くのに結構かかりました  
時間の経過とは恐ろしい

ペースはまだつかめませんが  
次は一週間以内に更新します

## 第六十四話 VSブルース・クロウ

ブルース・クロウの放った衝撃波から起こった爆風から  
ロックマンとハーブ・ノートが出てくる

「あぶなかった・・・」

『油断するなよスバル』

「うん」

その頃ブルース・クロウとヒールとアキタ

「ヒール・・・悪いけどこれも修行だから手を出すなよ？」

『・・・でも私がいなければミソラさんはノイズチェンジができない・・・』

「それも修行だ」

「クロウ・・・俺・なんかやること・・・ある？」

「ん？じゃあ電波変換頼む」

「あゝい 電波変換」

するとアキタを白い光が包み

白い戦士のような電波人間が現れる

「なんか・・・久々・・・だな・・・この姿」

「シヨックノート！」

「ん？」

アキタが上を見ると音符型の弾丸が飛んでくる

だがそれを電波変換したアキタはあっさりかわし

放った者のいる方向を見る

その方向にはミソラの電波変換したハーブ・ノートがウェーブロー

ドに乗っていた

「あれ・・・が・・・ハープ・ノートか・・・」

「アキタさん・・・」

するとブルース・クロウから

「アゝキタゝミソラちゃんは任せたゝ」と言われ

「オツケゝ」

と電波変換したアキタは返す

「まゝていうわけでゝスバル！お前の相手は俺だよゝ」

「・・・・・・・・・・」

「おいおいスバル・・・返事くらい――――しろって！」

ブルース・クロウはロックマンのいるところまでジャンプし右手のソードで切りつける

ロックマンは斬られのけぞるその瞬間

ロックマンがタヌキになり消える

そしてブルース・クロウの後ろに現れ斬ろうとする

がブルース・クロウは左手でそれを止める

「なるほどヘンゲノジュツか・・・」

確か自分の偽物を作り出しそれを攻撃した敵を切るバトルカードでもそれじゃ・・・」

そう言うところブルース・クロウはロックマンに向かって剣を振るう

ロックマンはそれを紙一重でかわす

そしてブルース・クロウの振った剣は

部屋にあった冷蔵庫のようなものに当たり破壊する

「まあスバルなら今程度の攻撃は避けるよなただまあそれが狙いなんだがね」

その言葉を言うとブルース・クロウはその場所から離れる

するとその冷蔵庫から大量のノイズが溢れ出す

「!!!?これは!?!」

『ノイズ!?!』

「さあノイズチェンジしてみろよ、ロックマン!」

## 第六十四話 VSブルース・クロウ（後書き）

クロウのキャラが違う……

いつものクロウはいつ帰ってくるのだろうか……

まあ作者だから知ってるけどね

……本当はまだ考えてないんですが……

第六十五話 黒い空間！？（前書き）

ちよつと短めです

## 第六十五話 黒い空間！？

「ノイズチェンジ！イヴァルヴノイズ！」

周囲のノイズがロックマンを包みロックマンは  
イヴァルヴノイズにノイズチェンジする

その状態のロックマンをブルース・クロウはジーツと観察する

（ふむ・・・フィーリングスとの戦いより進化してるな）

「余裕だね・・・」

「というと？」

『そのまんまの意味だ！』

「そうです——か！」

ブルース・クロウは剣を振り衝撃波を飛ばす

「ロックバスター！」

ロックマンはその衝撃波をロックバスターで相殺する  
がその瞬間ブルース・クロウはロックマンの後ろに回り込み剣を構  
えると

『させるか！ビーストスイング！！』

「おっと」

ウォーロックの爪はブルース・クロウを捉えることはなく  
あっさりかわされる

『今だスバル！』

「うん！オーバーチャージロックバスター！」

「これも威力上がってるなあ」

ロックマンの放った巨大なロックバスターは  
ブルース・クロウに向かって飛んで行く

「よし！これなら！」

「あめえよ」

ブルース・クロウは目の前を……

目の前の空間を丸く斬る

するとそこが黒い空間になり

そこにロックバスターが入り込む……

そしてその黒い空間は閉じ

元の空間に戻る

「な、何今の！？」

『まるで空間を切り裂いてるみてえだ』

「ん？ウォーロック惜しいな」

『あ？』

「今のは空間を切り裂くんじゃない別の空間の入り口を作ったんだ」

「『……！？』」

第六十六話 NO!進化!? (前書き)

更新できなくて本当すいません！  
やっと書く時間ができました！

サブタイトル少しふざけてますね・・・はい・・・

## 第六十六話 NO!進化!?

「どういうこと!?!?そんなことが……」

『そ、そんな能力が存在するのか』

ロックマンとウォーロックは驚いているブルース・クロウの

「別の空間の入り口を作った」という発言に

しかしその二人にブルース・クロウはあっさりと

「可能だよ」と返すそして

「この電波変換の力じゃないけどね」と続ける

「……でも攻略法は必ずある!」

【・・進化しろ……】

「!!!?!」

『どうしたスバル?』

「え?聞こえなかったの今の……」

『はあ?』

「……またか……まずいな……」

ブルース・クロウは気づかれなくらいに焦っていたその焦りの真意は謎だ

そして再びロックマンに謎の声が聞こえる

【・・さらなる進化を……】

「さらに進化しろってことかな……」

ブツブツ

『スバル?』

「ロック!」

スバルはブツブツ独り言を言うと突然ウォーロックに話しかける

『な、なんだ!?!』

「ノイズを集めて……もしかしたらできるかもしれないんだ・

……」

『何がだ?』

「更なる進化……. . . だろ」

「うん」

『は?わけわかんねえ……. . . 』

「でもスバル……. . . 悪いけど……. . . それは——なしだ!?!」

そういうとブルース・クロウはハンターを取り出し

なにかを入力する

ピッ ピッ ピーーーーー

するとブルース・クロウの右手に透明な玉が現れる

「な、なにそれ……. . . 」

「こっ——の!」

ブルース・クロウはその透明な玉を地面に叩きつける

ブワーーーーーッ

その玉はブルース・クロウとロックマンを包むように広がる

「な、なにこれ……. . . うわぁ!」

第六十六話 NO!進化!? (後書き)

実はこの話と次の話最初の予定とかなり違うんですね・・・  
変えるのに苦労しました・・・

## 第六十七話 電波変換解除！？（前書き）

最近更新しないのに慣れてきてしまってます・・・  
くそーどうやったら上手く時間が作れるんだ！

今回ちょっと書き方が変わってます・・・  
あと空の行が多い・・・

## 第六十七話 電波変換解除！？

電波変換の解除……

思えばコレをやるほど電波人間の弱点は無い

しかし電波変換を解除する方法といえは

電波変換した本人が解くか大きなダメージ又は大きな疲労を与える  
かだ

しかしその二つにはある共通点があった

そうそれはシンクロ率のダウンだ

シンクロ率とは前にキール・ドラゴの言っていたことのことだ

そのシンクロ率が高ければ

強くなれ

息は合い

なにより心を通わせられる

しかしシンクロ率が下がって招く結果とは

体にダメージを負い

弱くなり

そして

拒絶される

それらが何を意味するか……

そう

電波変換の解除だ

どこが共通するかそれは

自力の電波変換の解除は意識してるのかしてないのか

自らシンクロ率を下げてるのだ

そしてダメージや疲労の場合は

そのダメージと疲労でシンクロ率が下がるのだ

そしてもし強制的にシンクロ率を操作できたら……

「まあそんな事でければ立派な兵器に入るかもな」

「そ、そんな!!」

ブルース・クロウ・いやクロウのしたことそれは

電波変換の解除だった

**第六十七話 電波変換解除！？（後書き）**

全然話が進まないまま終わっちゃたよ・・・  
にしても今回文字数少ない・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9945s/>

---

流星のロックマン 大切な絆の物語

2011年10月9日01時40分発行